

F83-G67-6ウ



1200500765356

F03

7



始



569

14

庫文波岩

1497

シッカルエチ

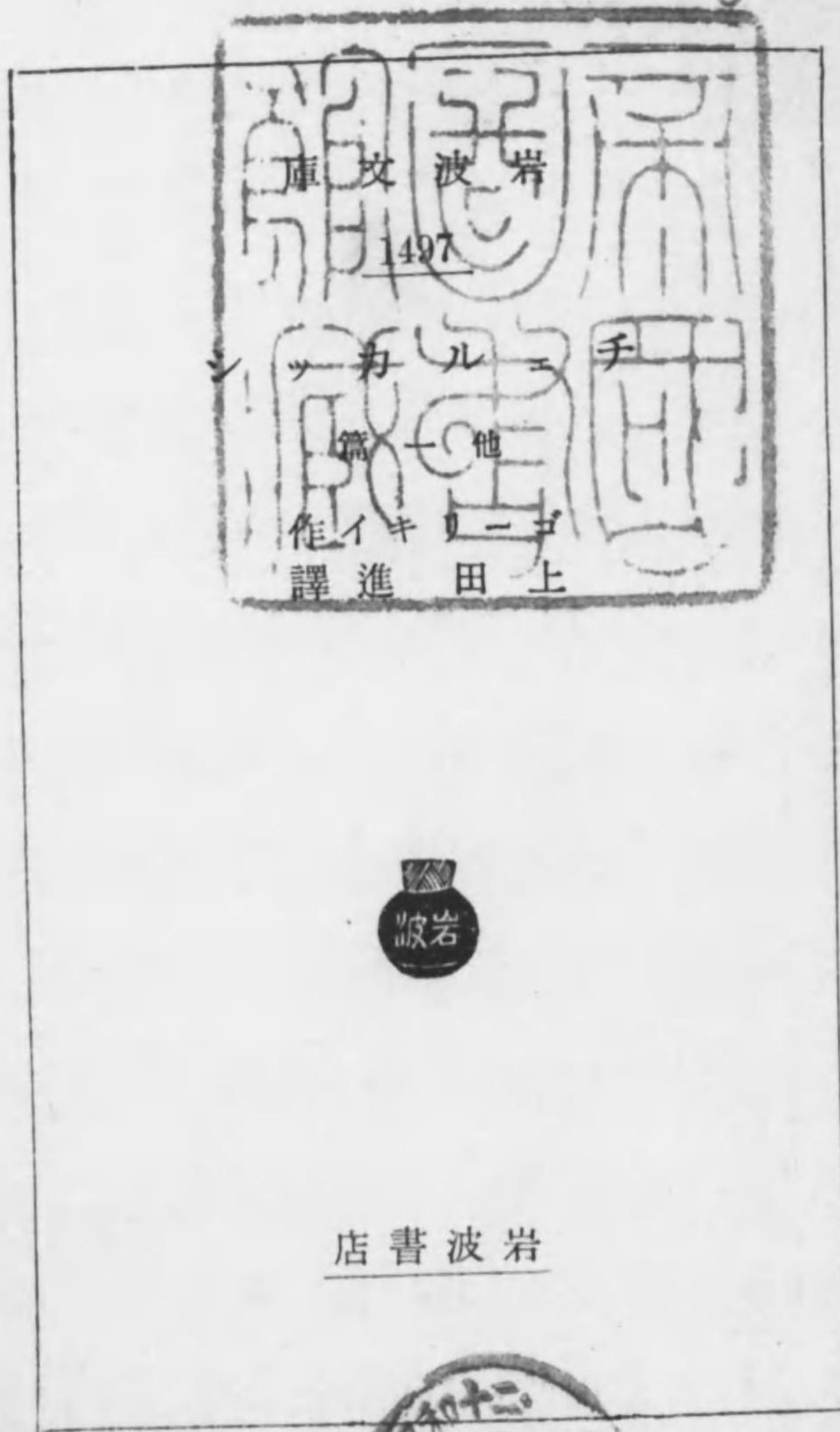
篇一他

作イキリーゴ  
譯進田上

店書波岩

233

F83  
G67  
6



店書波岩



569  
14

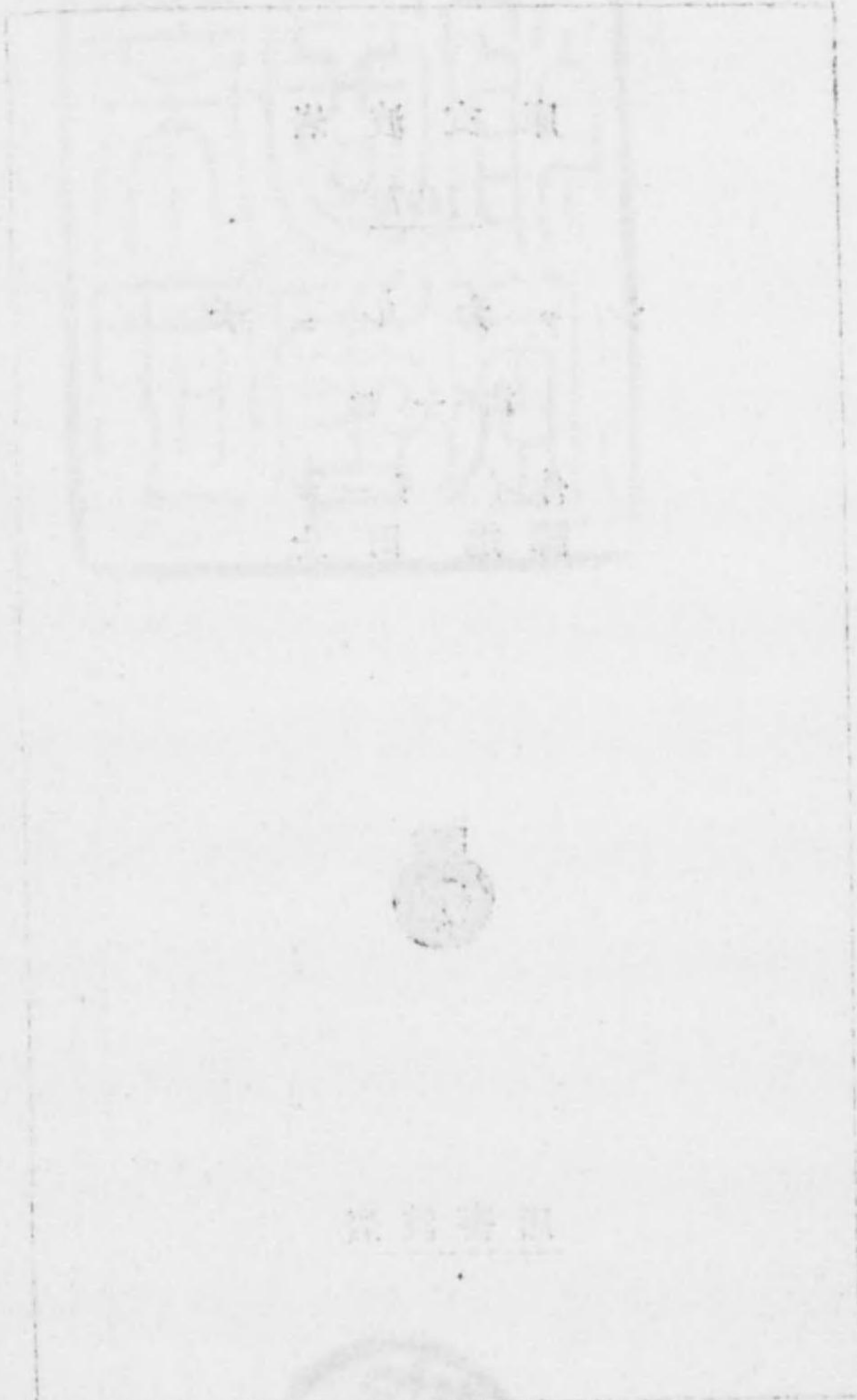
次

目次

チエルカッシ ..... 五

二十六人の男と一人の少女 ..... 八九

解題 ..... 一三七



チ  
ェ  
ル  
カ  
ッ  
シ

1900  
11

日  
六

Vertical text on the right page, possibly bleed-through or faint print, including the characters "日六" (Day 6).

青青とした南國の空は埃におほはれて、どんよりとしてゐる。やきつくやうな太陽は、まるで  
 うすい灰色のヴェールをまはしてながめるやうに、緑の海を見おろしてゐる。ところが、水面が  
 權や汽船の暗庫や、トルコ船の龍骨や、その他この窮屈な港のなかをあつちこつちと歩きまは  
 つてゐるいろんな舟の舳でかきみだされてゐるので、太陽のすがたはほとんど映らない。花崗岩  
 でかこまれたこの海の波は、なにか脊中におそろしく重いものでも脊負はされたやうにフウフウ  
 いひながら、ざぶんざぶんと舳をうち、岸をうち、汚いごみをいつばいうかべて、がばがばと泡  
 をたてながら、しきりに泣言をならべてゐる。

錨をおろす鎖の音、貨物をのんだ貨車を聯結する音、どこからともしれず棧橋の敷石のうへに  
 おちてきた鐵板のとどろき、材木がぶつかりあふ鈍い音、辻馬車の輪のひびき、つんざくやうな  
 鋭い汽船の汽笛、ものうげに吼えたてる汽笛、沖仲仕や船員や税關吏たちの叫びごゑ——これら  
 のすべての物音が一つに溶けあつて、耳を聳するばかりのすさまじい労働の音楽をかんで、それ  
 はいらだたしげにゆらめきながら、港の上の空ひくく漂つてゐる。それをめがけて後から後から  
 と、新しいさまざまの音の波がまひあがつてゆく——あるものは陰鬱な吼え聲をあげて無遠慮に  
 あたりのものをふるへあがらせ、またあるものは甲高い、鋭い音をたてて、むしあつい埃つぽい

大氣をひきさいたりする。

花崗岩も、鐵も、材木も、港の棧橋も、船も、人間も——みんなが力づよい聲をはりあげて、商業の神に熱烈な讃歌をささげてゐるのである。けれどそのなかで人間の聲は、ほとんど聞えるか聞えないかぐらゐにかほそく、滑稽である。まづ一番さきにたつてこんな騒ぎをうみだした當の人間が、いちばん哀れつぼくて、滑稽なのだ。彼らは、埃にまみれ、ぼろをまとひ、脊中にしよつた荷物の重みで腰を二重にまげて、埃の雲のなかや、炎熱と騒音の大海のなかを、いそがしげにちよこちよこと、あつちこつち走りまはつてゐる。そのすがたは、彼らをとまりまいてゐる巨大な機械や、莫大な商品の堆積や、すさまじい音をたててゐる貨車や、その他人間の手づくりだされたすべてのものにくらべると、まつたく取るにたりない小つぼけなものに見えた。人間は、いまではあべこべに、自分のつくりだしたものの奴隷となり、それらのものによつて骨抜きにされてしまつたのだ。

埠頭についてゐる、重重しい、巨大な汽船がかはるがはるに、汽笛をならしたり、蒸氣を吐いたり、ふかい溜息をついたりする。ところが、その汽船どもがたてる音の一つ一つには、甲板を這ひまはつて、深い船艙に自分らの奴隷的な労働の産物をつみこんでゐる人間たちの埃にまみれた灰色の姿をあざけるやうな、侮蔑の調子がこもつてゐるやうに思はれる。自分の腹へいれるた

つた二斤か三斤のパンを手に入れるために、何千斤といふパンを汽船の大きな鐵の腹のなかへ、かつぎこんでゆく仲仕たちのながい行列は、まつたく涙がこぼれるほど滑稽なものにみえる。ぼろぼろの着物をまとひ、汗みどろになり、疲労と騒音と炎熱とでポーンとなつてしまつてゐる人間どもと、その人間の手によつてつくりだされたところの、あの悠然として太陽の光をうけて輝いてゐる、力づよい機械類——この二つのものの對照のなかには、實に辛辣な諷刺の一大敘事詩があるのであつた。——しかもその機械といふやつは、やはり蒸氣の力だけではどうにもならず、結局はそれをつくりだした人間の血と肉とによつて、はじめて活動をあたへられるものなのであるが。

騒音は頭をおさへつけ、埃は鼻をこそぐつて、眼をくらまし、炎暑は肉體を焼き、へとへとに疲らせる。あたりのものみなは、いまや緊張の極點に達し、ちよつとでも手をふれたらたちまちものすごい大變災がおこつてきさうに思はれた、けれどその爆發がすんだあとは、大氣もすつかり清清しくなつて、自由にのびのびと呼吸ができるやうになり、靜寂が地上を支配し、いまのこの耳がガンガンし、頭がいらいらして、しまひには氣でも狂つてしまひさうな、埃つぼい騒擾がきえて、町も、海も、空も、しづかに、明るく、氣持よくなるであらう、と思はれた。

十二時を報ずる、規則ただしい、高らかな鐘の音がなりわたつた。その最後の音が、ながく尾

をひいてきえてゆくころには、もう奇怪な労働の音楽は、ずつと靜かになりかけてきた。そしてそれからもの一分もたたないうちに、それはもうぼんやりとした、氣のなささうな泣きにかはつていつた。やつと人間の聲と波の音とがきこえてきた。さあ、おひるだ。

仲仕たちは仕事をすてて、がやがやと群をなし、埠頭のあちこちにちらばつて、てんでに物賣りからいろんな食物を買ひこみ、その邊の敷石道の日かげになつてゐるところに陣どつて、食べはじめた。そこへひよつこりと、グリーシカ・チェルカッシが姿をあらはした。狩りたてられた古狼といへば、この埠頭の連中のあひだでは相當に名の賣れてゐる顔役で、しよつちう酒びたりになつてゐるけれど、いざとなるとなかなか凄腕をみせる、大膽不敵な泥棒であつた。彼は、古いぼろぼろのコール天のズボンをはいてゐるだけで、靴ははかず、帽子もかぶつてゐない。ごすごすに汚れた更紗のルバーシカは、襟がひきちぎれて、そこから褐色の皮膚につつまれた、かさかさし、ごつごつした骨組があらはにみえた。白髪がいく條かまじつた黒い髪の毛をぼさぼさにみだし、とがった慥慥な顔をくしやくしやにしてゐるところを見ると、どうやらいま起きてき

たばかりのところらしい。その褐色の口髭の片方のところに薬が一本つきささつてをり、左の頬べたのざらざらした刺りあとにも一本ひつかかつてゐた。それから、いまくる道で折つてきたらしい菩提樹の小枝を、耳にはさんでゐた。彼は骨ばつたひよるながい身體をいくらか前こごみにして、敷石のうへをゆつくりと歩いていつた、そしていかにも慥慥さうな鉤鼻をひくひくさせながら、鋭い眼ざしを四方にくばり、冷い灰色の眼をきらりきらりとひからせて、仲仕たちのあひだからだれかを物色してゐた。彼の濃い、ながい褐色の口髭は、ときをり猫の髭のやうにびくびくとふるへた。脊中にくんだ左右の手をしきりにこすりあはせ、長い、鉤のやうにまがつた、ねばつこい指を神経質にからみあはせるのであつた。みんな自分とおなじやうに、ぼろぼろのいかにも浮浪人じみた恰好をした連中が何百人とあつまつてゐるこんなところでは、彼は曠野の大鷹そつくりの容貌と、慥慥な瘦軀と、ちやうどその大鷹が空の高みから獲物をねらつてゐるときのやうに、外見はいかにも屈托なささうな、おちつきはらつた容子をしてゐるが、内心では氣負ひこんで、激しく眼をひからせてゐるといつたやうな、油断のならない歩きつきなぞによつて、一眼でそれとわかるのであつた。

彼が、石炭籠を山のやうにつんだかげに陣どつてゐる浮浪人の仲仕連中の一つの群のまへにゆくと、そのなかから、顔に紫いろのあざをいつばいつけて、頸にまだなまなましい引掻き傷をた



くさんこしらへた、鳶色の肌をした小柄の男が、彼の鼻さきにたちあがつた。その男はチエルカッシによりそつて、肩をならべて歩きながら、聲をひそめて言つた。

——海軍の工場がまた二所あらされたんだつてさ……いま犯人を捜索中なんだぜ。

——ふうん、それでどうしたつてんだ？——チエルカッシはおちつきはらつて、相手の頭から足のさきまで見おろして、訊いた。

——別にどうもしねえが……いま犯人を捜索中だつて話さ。ただそれつきりのことよ。

——それで何か、このおれに捜索の手つだひをしてもらひてえとでもいふのか？

そしてチエルカッシは笑ひながら、義勇艦隊の倉庫がたつてゐるあたりをながめた。

——うるせえな！ もう、あつちへいけ！

相手はくりりと後にむきかへつた。

——おい、ちよつと待て！ 手前、だれにこんなお化粧をしてもらつたんだい？ これぢや看板が臺なしぢやねえか……ところで、手前、この邊でミーシカを見かけなかつたか？

——さあ、しばらく姿を見ねえな。——その男は自分の仲間たちの方にかへりかけながら、叫んだ。

チエルカッシはなほも先にすすんでいつた。ゆきあふ人がみな、親しげに挨拶した。けれど、

いつもは陽気で皮肉屋の彼が、今日はどうやら何かお氣に召さないことがあるらしく、だれに言葉をかけられても、ひどく面倒くささうに、ぶつきらぼうに二言三言、言葉をかへすだけであつた。

埃だらけの暗緑色の制服をきて、軍人のやうに肩をいからした税關の守衛が、どこか積荷のかげのあたりからひよつこりと出てきた。そして、チエルカッシの行手をさへぎり、左の手でサールのつかをにぎつてグツと反り身になつてまへに立ちふさがり、右手をのばしてチエルカッシの襟首をつかまへようとした。

——待て！ どこへいくんだ？

チエルカッシは一步退いて、眼をあげて守衛の顔をながめ、フンと鼻のさきでわらつた。

いかにも人の好きさうな、そのくせどこか狡るさうなところのある、緒ら顔のその役人は、相手をおどかしつけるやうな嚴めしい顔つきをしてやらうと思つて、ブツと頬をふくらませて、火吹達磨のやうにまつ赤な、まんまるな顔をし、眉をつりあげ、眼をむきだしたものだから、すこぶる滑稽な御面相になつてしまつた。

——この埠頭をうろろしちやいかん、こんど見つけたら肋骨をたたき折つてくれるぞ、つて言つておいたぢやないか！ それなのに、貴様、またのこのこ出てきたりしやがつて！——守衛

は頭くだしどなりつけた。

——まあ、さう言ひなさんな、セミヨイヌイチ！ ずるぶん久しぶりぢやねえか。御機嫌よう！——チエルカッシは、おちつきはらつて挨拶をして、彼の方に手をさしのべた。

——きさまの顔なぞは、百年が二百年でも見たくねえわ！ さあ、さつさと歸れ！ 歸れ！……

しかし、さういひながらもセミヨイヌイチは、やはりさしのべられたチエルカッシの手ににぎつた。

——そりやまあさうとして、旦那。——チエルカッシはおそろしく力のある指でセミヨイヌイチの手ににぎつたまま、いかにも親しい間柄のやうに、それをふりながら、言葉をつづけた。——お前さん、ミーシカを見かけなかつたかね？

——まだミーシカとか言つてやがるのか？ ミーシカなんて野郎は、わしや全然知らんわい！ さあ、早くいけ、いけ！ また倉庫係の役人にでもみつかつたら、うるさいからな……

——ほれ、以前にコストロマの町でおれといつしよに働いてたことのある、あの<sup>あかひ</sup>禿毛の野郎さ。——チエルカッシはなほも自分のいひたいことを言ひ張つた。

——いつしよに泥棒をやつてた奴、といつたらどうだ！ きさまのいふそのミーシカつて野郎はな、せんだつて鐵材で足をくじかれて、病院へかつぎこまれた。さあ、おい、わしは本氣でたのむんだがな、あつちへいけよ、なあ、トットといけよ、ぐづぐづしてると本當に首つ玉つかんで、ひきずりだすぞ！……

——アハハ、それ見な！ お前さん、ミーシカのことには知らねえなんていつたくせに……ちやあんと知つてるぢやねえか。お前さんはいつたい、どうしてさう怒りつばいのかね、セミヨイヌイチ？……

——またそれだ！ さあ、もうぐづぐづ言つてないで、いけ、いけ！……

守衛はほんとに腹をたてはじめた。彼はあたりをぐるつと見まはしながら、チエルカッシの吸ひつくやうに力づくよく握つてゐる指さきから、自分の手をもぎはなさうとした。ところがチエルカッシはおちつきはらつて、濃い眉毛の下からじろりじろりと相手の顔をながめながら、依然としてその手ににぎつたまま、話をつづけた。

——さう急きたてなさんな！ 話がすみせえしりや、だまつてたつて、こつちからお暇<sup>いとま</sup>すらあね。ところで、どうです、このごろの景氣は？……おかみさんや、子供衆は達者ですかい？——そこで彼は眼をきらりとひからせ、齒をむきだして、いかにも相手を見くびつたやうな笑ひを

うかべながら、つけ加へた。——一度お前さんとこへ御挨拶にあがらうと思つてゐるんだが、なんしろ一向に暇がなくなつてね。ごらんのとほり、かうして毎日のんだくれてゐるもんで……

——よし、よし。さあ、この手をはなしてくれ！ おい冗談はよせよ、馬鹿め！ わしはもうきさまを、本當に……それとも、なにか、きさまはもうこの町のどこか目ぼしい家をねらつて、仕事をおつはじめようとも思つとるのかね？

——なぜさ？ そんなことしなくつたつて、ここにゐりや、このまんまで結構らくに暮していけるんだぜ。ほんとにさ、らくに暮していけるんだよ、セミヨイヌイチ！ そりやさうと、また工場を二所ばかりやられたさうだね？……お前さんも氣をつけるこんだな、セミヨイヌイチ！なるべく、そんなことにや關りあひにならねえやうにした方がいいぜ！……

かんかんになつたセミヨイヌイチは、がたがた身をふるはせ、わきの方にベッベツと唾をはきながら、しきりに何か言はうとした。そこでチエルカッシは相手の手をはなしてやり、悠然としてその長い脚で大股をふんで、埠頭の關門の方にひきかへしていつた。守衛は口ぎたない罵詈雑言をあげながら、その後を追つた。

チエルカッシはすつかりいい氣持になつてゐた。彼は両手をズボンのポケットに突つこんで、ひくく口笛をふきながら、ゆつくりと歩いていつた——右に、左に、辛辣な皮肉や嘲笑をなげながら。すると兩側の連中も、それに應酬した。

——なんだ、グリーシカ、お前、今日は護衛つきだな！——もう晝食をすませて、地面にねころんで休んでゐる沖仲仕の群のなかから、だれかが叫んだ。

——うん。おれがな、靴をはいてゐねえもんだから、このセミヨイヌイチの旦那がな、刺でもささせちや大へんだといふので、かうやつて従いてきておくんなさるのさ。——チエルカッシがやりかへした。

二人は關門にちかづいていつた。二人の兵士が着物の上から手でさはつてみて、ざつとチエルカッシの身體検査をすますと、そのままさつさと彼を街路につきだしてしまつた。

チエルカッシは街路を突つきつて向ふ側にわたり、ちやうど酒場の扉口の向ひあひになるあたりの舗道の縁石のうへに腰をおろした。山のやうに荷物をつみあげた馬車が長い列をつくつて、ごろごろとすさまじい音をたてて埠頭の關門からでてきた。するとこんどはそれといれちがひに、空の馬車の長い列がなかにはいつていつた。その空の馬車の上では、馭者がピョンピョンはねあがつてゐた。港は、巨獸の吼え聲のやうなすさまじい轟きと、つんつん鼻をさすやうな埃とを、ふんだんに吐きだしてゐた……

この氣狂ひじみた雑沓のなかで、チエルカッシは、自分だけはなにかすばらしい人間のやうな

気がしてゐた。いま彼には、確實な稼ぎが眼のまへにぶらさがつてゐるのであつた。それは、ちよつとすばしく立ちまはりさへすれば、わづかの勢力で手に入るものだ。彼はそのすばしこさといふ點にかけては、相當自信をもつてゐたので、眼をばちばちやりながら、明日の朝になつたら紙幣束をしこたまポケットに突つこんで歩きまはつてゐるであらう自分の姿を想像してゐた……ふと、彼は相棒のミーシカのことを思ひだした。——足をくじいたりなんぞしてゐなきや、あいつは今夜などは大いに役にたつたがなア！しかし、ミーシカがゐなくて、一人だけでやるといふことになる、ひよつとしたらこの仕事はうまくいかないかもしれないぞと思ふと、チェルカッシはつひチェツと舌打ちをしてしまつた。さて、今夜はどんな工合にいくかな？……そこで彼はちらりと空を見あげ、それからずうつと街の方をながめわたした。

彼から五六歩はなれた舗道のわきに、一人の若者が腰をおろして、繻石に脊をもたせかけてゐた。その男は、青い縞のルバーシカをきて、おなじ布地のズボンをはき、ほろほろになつた赭茶色の圓帽をかぶり、草鞋をはいてゐた。そのわきには、小さな頭陀袋と、蘘菔につつんでその上を細繩できりきりまいた大鎌の刃とがころがつてゐた。若者は、肩幅がひろくて、ずんぐりしてゐて、髪は亞麻色、顔は日にやけ風にさらされてまつ黒であつた。そして碧い眼を大きく見ひらいて、いかにも人のよささうな、信頼しきつた容子で、チェルカッシの方をながめてゐた。

チェルカッシは、齒をむき、舌をだして、わざとおそろしい形相をし、眼をむいてグツとにらみつけた。

若者は、はじめのうちはいぶかしげに眼をばちばちやつてゐたが、やがてそのうちにとつぜん大聲をあげて無遠慮に笑ひだし、アハ、アハと笑ひながら、「をかした人だなア！」と叫んだ。そして、ほとんど地面から腰をあげずに、ぎこちない恰好で、自分のよりかかつてゐた石からチェルカッシが腰かけてゐる石の方へいざりよつてきた——埃まみれになつた頭陀袋を地面にずるずると引きずり、鎌の刃を石にことんことんとぶつけながら……

——おい、兄貴、いまごろこんなところをぶらついでるところを見てえと、お前さん、どうやら大分景氣がよささうだね！……彼はチェルカッシの方をむいて、相手のズボンをぐいとひきつかんで、いつた。

——ああ、いいともさ、兄ちゃん、なんしろすばらしい仕事があつたもんでな！——チェルカッシは笑ひながら、うなづいた。彼は、この子供みたいに明るい眼つきをした、實に健康で、人の好ささうな若者が、いつぺんで好きになつてしまつた。——お前は、何かい、草刈りにいつてきたんかね？

——さうさ、きまつてるわい！……だけど、いくら刈つても、二束三文だもんな、まつたくつ

まらねえ仕事さ！　なんてつたつて、人手が多すぎるんだよ！　みんながつがつしてけつかるもんでね、それでこんなざまになつちまふんだ。なるほどお互ひに仕事のうばひあひまではしねえけど、賃銀は値上げ放題さ！……クバニへいつたつて、六十哥ゴベイぐれえの割わりでしかくんねえからな。まるでお話にならねえわい！……むかしは、三留ムネトリも四留ムネトリも五留ムネトリもくれたもんだつていふ話だけどな！……

——むかしか？……むかしはな、ロシヤ人なら、ただちよつと姿を見せてやるだけで、三留ムネトリぐれえつつは貰へたもんさ。おれもな、十年ばかりまへに、思ひたつて出かけていつたことがあつたつて。コサツクの村へいつてよ、おれはロシヤ人だぞ！　つていふと、たちまち村ぢうの者がおれを見物にでてきて、おれの身體にさはつてみたりして、びつくりしてゐるやがるんだ、さうして、ハイ、三留ムネトリときやがるのさ！　おれはその金で、さんざ飲んだり食つたりして歩いた。まつたく、好きな、勝手なまねをして遊べたもんさ！

若者は、はじめのうちはボカンと大きな口をあけて、そのまるい顔に、どうも腑におちないといつた調子をおびた感嘆の色をうかべて、チエルカッシの話に耳をかたむけてゐたが、やがて相手がでたらめをいつてゐるのだといふことがわかれると、チツと舌打ちをして、大ごゑで笑ひだした。けれどチエルカッシは、わざと微笑を口髭のかげにかくして、あひかはらず眞面目な顔つき

をしてゐた。

——をかしな人だなア、お前めまさんは。まるで本當みてえに話すんだもの、おらあ本氣になつて、きいてた……いくら昔だつて、そんなことあるもんか……

——なあに、嘘うそぢやねえさ！　たしかに、お前めま、むかしはな……

——もういいわい！……若者は手をふつた。——それよりも、一つお訊きしてえだが、お

前めまさんは靴屋なのかい？　それとも、仕立屋なのかい？　いつたい、何なんだね？

——おれか？　——チエルカッシは訊きかへした、そしてちよつと考へてから、いつた。——漁

師しさ、おれあ。

——漁師？　へえ、お前めまさんが？……それぢや、なにかい、魚をとるのかい？……

——きまつてるぢやねえか！　しかし、この邊の漁師はな、なにも魚だけとつてゐるつてわけぢやねえんだぜ。土左衛門も掬くへば、古錨こいかりも釣りあげるし、沈んだ船をひつぱりあげたりすることもあるのさ！　さういつたときの釣道具も、ちやんとそろつてゐるのよ……

——嘘うそだ！　嘘うそばかいつてらあ！……んぢや、きつとお前めまさんも、ほれ……

おいらは陸をかの漁師でござる

倉庫や納屋に網をはる……

つて歌つてゐる、あの仲間ぢやねえのかい？

——それぢや、お前はあの仲間をみたことがあるのか？——チエルカッシは鼻さきに冷笑をつかべて、相手をじろりとながめながら、訊いた。

——いいや、まだ一度も見たことはねえけど！ ただ、話にきいてるだけで……

——好きか？

——その連中がかい？ そらあ、好きだともさ！……なにしろ、なんのわづらひもねえ、好き勝手なことのできる、自由な身の上だもんな……

——自由か？ そんなものがお前に、なんの用があるんだい？ え？……それとも、お前は本當に自由を望んでるのか？

——そらあ、望んでるともさ！ さうなりや、なんでも自分の思ふとほりになるんだからな。いきでえとこへいけるし、やりてえことがやれるし……おらあそれ以上は、なにも望みやしねえよ！ ちやんと一人立ちをしてゐて、他人から首つ玉に重石なんぞしぼりつけられねえつてことが、これが一番大切なんだ！ さうしてよ、好きなところを歩きまはるがいさ。ただ神さまの

ことだけは忘れねえやうにしてな。

チエルカッシはいましましげに唾をはいて、若者から顔をそむけた。

——まあ一つ、わしの身の上をきいておくんな……その若者が語りだした。——親父に死なれてみるてえと、身代なんかくろくになりやしねえし、阿母は年をとつてゐる、土地はすつかり荒れはててゐる、といつたやうなわけで、さあどうしたらいいか、おらあまつたく途方にくれちまつたもんです。しかし、とにかく暮しを立てていかなきゃなんねえ。それぢや、どうしたらいいのか？ わからねえ！ いつそ羽振りのいい家へ舞にでもいくか。それもいいだらう。しかし、娘はくれても、さ、その親父の野郎、身代まではとも分けちやくれめえ。さうなるてえと、おらあいつまでも、その親父に食ひついてることになる……五年か十年かしらねえが！ 考へてみりや、馬鹿くせえ話ぢやねえか！ なあに、おらあいまここで百五十留つかめや、立派にひとり立ちできるんだからな。アンチップの野郎んとこへいつて、ほれ、持つていきやがれ！ つていつて叩きつけてくれるんだがな。それから、マルファにも少しわけてやるかな？ いや、そんな必要はねえ。なあに、村の娘といへや、なにもあの女ひとりきりぢやあるめえし。さうなるてえと、つまりおらあ全く自由で、なんでも自分の思ひどほりにできるわけだが……ほんとにさ！——若者はそこで溜息をついた。——ところがいまぢや、舞にでもいくよりほかにや、どう

にも仕様がねえものな。そこで、おらあ考へちまつた。ようし、一つ、クバニへでも出かけてい  
つて、二三百留<sup>ルイヴ</sup>ばかりかつ掠つてきてやらうか！ それだけありや澤山だ！……ところが、な  
かなかさううまくはいかの天ぶらだ。仕方がねえから、日傭取りんなつて、稼いできたわけさ……  
……まつたく、自分の畑の仕事にかかるといふ段取りまでは、なかなかいかねえもんですわい！  
エへへッ！……

その若者には、聲にゆくといふことがとても嫌なことだつたらしい。だからその話になると、  
彼の顔はさつとくもつて、いかにも悲しさうになるほどであつた。彼は地面のうへで大儀さうに、  
ごそごそと身をうごかした。

チエルカッシが訊ねた。

——お前、これからどこへいくんだい？

——どこへつて言つて、きまつてるぢやねえか。家へ歸<sup>かへ</sup>えるだよ。

——ふうん、さうか。その料簡が、どうもおれにや胸におちねえな。おれはまたお前がトルコ  
へでもいかうつてんだらうと思つてたがな……

——ト、トルコへ？……——若者がどもりながら、いつた。——だれが、このロシヤからわざ  
わざ、そんなとこへ出かけていくもんか？ 嫌<sup>いや</sup>だなア、そんな冗談ばかりいつてて！……

——馬鹿野郎！ 手前<sup>てまえ</sup>はよくよくのまぬけだな！——チエルカッシは深い溜息をついて、また  
相手にくるりと脊中をむけてしまつた。この田舎くさい、健康な若者は、どうも何か彼の氣にさ  
はるのであつた……

腹だたしい、いらいらした氣持が、はじめのうちにはぼんやりとしてゐたが、やがてだんだんに  
はつきりとしてきて、どこか彼の胸の奥の方でもぞもぞとうごめいてゐた。そして、それにさま  
たげられて、彼は今夜しなければならぬ仕事のことを考へようとしても、どうしても考へをま  
とめることができないのであつた。

どなりつけられた若者は、ときをり相手の浮浪人を横眼でながめながら、口のなかで何かしき  
りにぶつぶついつてゐた。彼は妙な工合に頬をふくらませ、唇をとがらせ、眼をむやみにばちば  
ちやつて、實に滑稽きはまるしかめ面をしてゐた。どうやら彼は、この長い口髭をはやしてぼろ  
ぼろの着物をきた浮浪人との對談が、こんなにあつけなく、しかも糞面白くもない調子でをはり  
を告げようとは、全く豫想してゐなかつたらしい。

チエルカッシはもう若者の方になぞ眼をくれようともしなかつた。彼は縁石<sup>へりいし</sup>に腰かけて、はだ  
しで泥だらけになつた踵で調子をとりながら、もの思はしげに口笛をふいてゐた。

若者は浮浪人と圓満に片をつけたいと思つた。

——おい、漁師の兄貴！ お前さんは、よく飲むんだらうね？——彼はまた話をきりだした。するとそのとき、漁師の兄貴がくるりと顔をふりむけて、訊いた。

——どうだい、おい、兄ちゃん！ 今夜おれといつしよに仕事をする気はねえか？ え、どうだい、さあ？

——どんな仕事やるんだね？——いぶかしさうに若者が訊いた。

——どんな仕事だつていいぢやねえか！……おれがやらせることを、やつてくれりやいいんだ……まあ、魚をとりに行くのさ。お前に舟をこいでもらひてえんだ……

——そんなことか……それなら、何でもねえや。やるとも。ただなア……おらあ、お前さんのまきぞへを食ふやうなことだきや御免蒙るぜ。どうもお前さんは油断がならねえ人だから……どうしても、おらにや正體がつかめねえだもんな……

チエルカッシはピリッと胸になにか火傷でもしたやうな痛みを感じた。そして、わざと聲をひそめて、冷やかな、憎憎しげな調子でいつた。

——おい、いいかげんなことを、餘りべちやくちやしやべるもんぢやねえや。おれの癩にさはつたら、きさま、眼のさめるやうなやつがガンと一ついくぞ！……

彼は縁石からとびおりて、左手で口髭をひねりあげ、右手でごつごつした固い拳骨をにぎつて、

眼をぎらぎらひからせた。

若者はびつくりしてしまつて、きよときよとあたりを見まはし、臆病さうに眼をばちばちやりながら、同じやうに地面からパッとねおきた。さうして二人は、お互ひにじろりじろりと相手の様子をうかがひながら、黙りこくつてゐた。

——どうだい、おい？——チエルカッシはぞんざいに訊いた。彼はこんな青二才の若造から侮辱をうけたので、はらわたが煮えくりかへり、身體ぢうの節節ががくがくとふるへだすほど口惜しかつた。話をかはしてゐるうちから、彼はどうもそいつが氣にくはなかつたのだ。が、いまとなつては、もう何から何までが癪にさはつた。そいつのきれいに澄んだ碧い眼も、陽にやけた健康さうな顔も、短いがつちりした腕も、それからそいつがどこかに自分のかへつてゆくべき村をもつてをり、家をもつてゐるといふことも、また富裕な百姓がそいつを聲にしようとしてゐるなんていふことまでも——つまりそいつの過去から未來にわたつての全生涯が、彼には憎らしく思はれた。そのうちでもいちばん彼の癪にさはつたことは、彼チエルカッシの眼からみたらまるで子供みたいなこの小僧ツ子が、自由といふものの値打もしらず、またそんなものがほんとに要りもしないくせに、生意氣にも自由を愛してゐるなんて言つてゐることである。自分よりも劣つた、くだらない奴だと思つてゐる人間が、自分とおなじものを愛したり、憎んだりしてゐるのを見る



と、しかもそれによつてそいつがだんだんに自分に似てきたりするのを見ると、人はだれだつて面白くないにきまつてゐる。

若者はチエルカッシをじつと眺めてみると、だんだんにこの人が頼りになれさうに思はれてきた。

——なんにもおらあ、そんな……嫌だなんていひやしねんだよ。——彼はいひだした。——だつてさ、おらあいま、仕事さがしてゐるんだものな。お前さんここで働かうと、他の人んここで働かうと、誰んここで働いたつて、おらにや同なじことです。ただなア、お前さんはどうもまともな働き人のやうには見えねえつて、おらあ言つただけさ。なんしろお前さんは、ひでえぼろをきてるんだもの……そりや、誰にだつて、こんなことはよくあるもんだつてことは、おらだつてもちやんと知つてゐるです。酔つばらひを見るのは、何もいまはじめてのことぢやねえですものな！

——うん、よし！ 承知だな？——チエルカッシはもうすつかり語氣をやはらげて、訊きかへした。

——おらがかい？ ああ、承知だ！……おらあ、よろこんで働かしてもらふだ！ ところで、手問賃はどのくれえ頂けるんでせうかな？

——そりや仕事次第だ。つまり、仕事のがり高に應じて、拂つてやるつてわけよ……まあ大體、二割ぐれえもらへると思つてりやいいさ。わかつたか？

けれど、かうして話が金銭のことになると、百姓はその點をもつとはつきりさせ、雇主からたしか言質をとつておきたかつた。若者の心のうちには、また不安と疑惑とがむくむくと頭をもたげてきた。

——そこんことをはつきりさしてもらはねえと、おらあどうも工合がわりいな、兄貴！  
チエルカッシはそろそろと本領を發揮しはじめた。

——ぐづぐづいはねえで、少し待て！ それより、まあ一杯やりにかう！  
二人は肩をならべて街をあるいていつた。チエルカッシは、口髭をひねりながら、いかにも親方らしくふんぞりかへり、若者の方は、いひつけられたことなら何でもいたしますといふやうな顔つきをしてゐた——しかし、そのくせその顔つきには、不安と危惧の色がありありと浮んでゐるのであつた。

——ところで、お前の名前は？——チエルカッシが訊いた。

——ガヴリーラつていふんで。——若者がこたへた。

二人は煤ほけた、汚らしい居酒屋にはいつていつた。チエルカッシはすぐにスタンドのそばに

よつていつて、いかにも常連らしい親しげな調子で、ウォトカと、シチューと、ピフテキと、お茶とを注文した、そしてその品をもう一度かぞへあげると、給仕にむかつてあつさり、「つけといてくれ！」といった。給仕はだまつてうなづいた。それを見るとガヴリーラは、自分の親方はあんな日備取りみたいなみすぼらしい恰好をしてゐるけれど、なかなかどうして、とても顔が賣れてゐるのだなと思ひ、急にまた尊敬の念をいだいたのであつた。

——さあ、それぢやここで一杯やりながら、くはしい相談をしようか。だがな、その前におれはちよいとそこまでいつてくるから、そのあひだお前めえここで少し待つててくれ。

彼はでかけていつた。ガヴリーラはぐるりとあたりをひとわたり見まはした。この居酒屋は地下室にあつた。ひどくじめじめしてゐて、うすぐらくて、腐つたウォトカや、安煙草のけむりや、コールドールや、その他いろんなものの、むーつとするやうな臭ひがいつぱいにこもつてゐた。ガヴリーラのむかひの卓テーブルには、マドロスの服をきて、緒い頬鬚をはやし、身體ぢゆう石炭の埃とタールとでまつ黒になつてゐる酔つぱらひが坐つてゐた。彼はひつきりなしに吃逆しゃっくりをしながら、鼻唄をうたつてゐた、けれどそれはいいかげんな言葉をでたらめによせ集めただけで、てんで歌にはなつてゐなかつた。それがまたときどき咽喉のどにからまつて、おそろしくせいせいといふ音をたてるのであつた。その男がロシア人でないことは一眼でわかつた。

モルダヴィヤ女が二人そのうしろの方に陣どつてゐた。二人ともほろほろの蕭物をきてをり、髪は黒く、顔も陽にやけてまつくろであつた。この女たちもいいかげん酔つぱらつて、キーキー聲をあげて歌をうたつてゐた。

しばらくすると、なほ幾人かのさまざま人の姿が、闇のなかからぼんやりとうかんできた。みんな相當酔つぱらつてゐて、妙にだらしない恰好をし、ぞわぞわと少しもおちつかず、やたらにわめきちらしてゐる……

ガヴリーラはうす氣味わるくなつてきた。親方が一刻もはやくかへつてきてくれればいいがなと思つた。居酒屋のさわぎは一つの音響に溶けあひ、それはまるで何か大きな獣が吼えてでもゐるやうに思はれた。それは數しれぬさまざまの聲をいつしよくたにかきあつめて、がむしやらのこの石の穴倉から外にとびださうとしてゐるのだが、どうしてもその出口が見つかからないのであるといつた調子であつた。ガヴリーラは、なにかかう彼の心を酔はせてしまふやうな、ぶきみなものが體內にもぐりこんできたやうな氣がした、そのために彼は頭がくらくらしてき、つひいままて恐いもの見たさにキョロキョロと居酒屋のうちを見まはしてゐた眼が、急にポーンとかすんできた……

チェルカッシが歸つてきた。そこで二人は飲み食ひをはじめた——いろんな話をしながら。ガ

ヴリーラは、三杯のむと、もうすつかり酔ひがまはつてきた。彼はいい氣持になつてしまつて、なにか一つ親方の氣にいるやうなことを言つてやりたいと考へた。なにしろ、こんなに御馳走をしてくれるんだから、すばらしい親方だ。けれどその文句は、うちよせる波のやうに咽喉もとまではこみあげてくるのだが、そこまでくるとなぜか急にへなへたと崩折れてしまつて、どうしても舌の上につてこないであつた。

チエルカッシはそのありさまを見て、鼻のさきで笑ひながら、いつた。

——まゐつちまつたな！ え、おい、大将！ たつた四杯か五杯の酒でよ！……どうだい、仕事はできさうか？……

——大丈夫だい、兄貴！……ガヴリーラがもぐもぐと口のなかでつぶやいた。——心配するなつてことよ！ おらあ、お前さんを尊敬してゐるんだぜ！……だから、一つ、お前さんに接吻さしておくれよ！……なあ、どうだね？……

——うん、いいともさ！……それより、まあどうだ、もう一杯やれ！

ガヴリーラはまた飲んだ。そしてたうとうしまひには、すつかり酔つぱらつちまつて、彼の眼にはすべてのものがゆるやかに波をうつてゐるやうに見えてきた。さうなると、ひどく氣持がわるくなり、吐きつぽくなつてきた。そして、とてもまのぬけた、おめでたい顔つきになつた。彼

はなにか言はうとしては、妙な工合に唇をピチャピチャとならすのであつたが、一向に呂律がまはらなかつた。チエルカッシはなにか思ひださうとでもするやうに、じいつと彼の顔をながめながら、口髭をひねつてゐた。その顔には、たえず陰氣な微笑がただよつてゐた。

酔つぱらひどもが喚く、どなる……居酒屋はもう大へんなさわぎであつた。赭毛のマドロスは卓チツルに頬杖をついて、眠りこけてゐた。

——さあ、いかう！——チエルカッシが立ちあがつて、いつた。

ガヴリーラも立たうとしたが、腰がもうあがらなかつた、でそこに坐つたまま、またむちやくちやにわめきちらし、酔つぱらひ特有の他愛なさで、げらげらと意味もなく笑ひこけた。

——しやうがねえ野郎だな！——チエルカッシはさういつて、もう一度彼のむかひに腰をおろした。

ガヴリーラは、どろんとした眼で親方の顔をながめながら、なほもげらげらと笑ひつづけた。チエルカッシの方でも、もの思はしげに、相手の顔をじつと穴のあくほど見つめてゐた。彼がいま眼のまへにみてゐるこの男は、彼の狼のやうな掌のなかに、その一生を托してしまつたやうなものである。彼チエルカッシは、その男の運命を、どうにでも自分の思ふがままにころがしてやることができるのだ、といふ氣がした。彼はその男の生涯を、カルタかなんかのやうに、もみく



らずつとはなれたひろい海面には、たくさん船が黒くろとした船體をうかべ、空をつきさすやうに尖つた櫓をさしのべ、その頂にさまざまの色の燈をかかげてゐるのであつた。その燈火が海にうつり、ちやうど水面に無数の黄いろい斑點をまきちらしたやうである。それはピロートのやうにやはらかに黒びかりのする海面に、美しくかがやいてゐた。海は、一日ちゆう働いてぐつたり疲れてかへつてきた勞働者のやうに、健康な、ふかい眠りにおちてゐた。

——さあ、いきませう！——ガヴリーラが櫓を水にいれて、いつた。

——よし！——チエルカッシはぐいぐいと舵をうごかして、たくさん傳馬がもやつてゐるあひだの水路にボートをおしすすめていつた。それは水面をついついとすべるやうに走つた。水は漕でかきたてられるたびに、青い燐光をはなつてかがやいた。船尾のうしろに、ながい紐のやうにのびた水尾も、やはらかな光をはなつてゐた。

——どうだい、まだ頭がいてえか？——チエルカッシがやさしく訊いた。

——まだ、とても！……まるで頭んなかで鐵板をがんがんならしてゐるやうです……ひとつ、

この水でザブザブと頭をあらひてえもんだが……

——そんなことしたつて何にもなりやしねえさ！ それよりも、お前、腹んなかから冷した方が早道だ、おきにさつぱりすらあな。——さういつて、彼はガヴリーラの方に嚙をさしだした。

——ほんとかい、親方？ くらあどうも濟まねえな！

——ごくりごくりとのみこむ音が、かすかにきこえた。

——どうだ、おい、うめえだらう？……さあ、またいかう！——チエルカッシはその邊で相手に切りあげさせた。

ボートはまた音もなく走りだし、巧みに船と船とのあひだを縫つてすすんでいつた……するとふいにそれは船のむれをつきぬけて、ひろい海面にでた。眼のまへには涯しのない、力づよい海がよこたはつてゐた。青くかすんだ遙かな涯に眼をやると、水のなかから雲の山が空にむかつてもくもくとせりあがつてくるのが見えた——ぼやぼやした黄いろい縁をとつた、紫がかつた鳩羽色の雲もあれば、海の水とおなじやうな浅黄色の雲もあり、暗くおもしろい影をなげてゐる陰鬱な鉛色の雲もあつた。それらの雲はのろろと空を這つてゆき、おたがひにくつついたり、追ひかけつこをしたりして、かさなりあつては色も形もごちやごちやになるかと思へば、またはなれて、まつたく別な、ひどく氣むづかしげな、いかめしい形になつたりする……この命なき雲の大群の、のろろとした動きのなかには、なにかしら宿命的なものが感じられた。まるでこの雲は、海の涯で數かぎりなくつくりだされて、あとからあとからとひつきりなしに、圖圖しく空に這ひあがつてゆくかのやうに思はれた。しかも、清らかな星の光を尊ぶ人人の胸に高貴な望みを

もえあがらせる、色さまさまの星が、ねむつてゐる海の上で、幾百幾千萬の黄金色の瞳をかがやかせて、生き生きと燃え、夢みるやうに光つてゐるのを、邪魔しようとする意地のわるい企らみをいだいて。

——どうだい、海はいいだらう？——チエルカッシが訊いた。

——ううん。どうも、おらにや、ただ恐かねえだけで……——ガヴリーラが權で規則正しく、力づく水をかきながら、こたへた。ながい權を水に入れるたびに、水がはねかつたが、しかし水音はほとんどたなかつた。ただ、はねかつた水が、あたたかさうな青い燐光をはなつて、光るだけである。

——恐かねえだと！ 馬鹿野郎め！……——チエルカッシが、いかにも相手をさげすむやうな調子で、つぶやいた。

彼は海がとても好きだつたのだ。さまざまの印象を貪婪にとり入れる彼の神経質な、はげしい気性は、この暗い、涯しくひろい、自由な、力づよい海をながめてゐると、けつしてあきることになかつたのだ。ところが、自分が愛してゐる海の美しさにたいして、そんな冒瀆的な言葉をきかされたのだから、彼はおもしろくなかつた。船尾に坐つて、舵で水をきつて進みながら、彼はじつと前方をながめてゐた——その胸のうちには、このまま、このピロードのやうにおだやかな海面をどこまでも突走つてゆきたいといふ望みが、いつばいにみちあふれてゐた。

海にでると、いつも彼の胸には、のびのびとした、あたたかい氣持がわきおこつてくるのであつた。そしてそれは彼の心をすつかりつつみ、浮世のわづらひを洗ひきよめてくれるのであつた。彼はそれをよろこび、さういふときこそ自分が一番立派に見えるやうに思へた。まつたく、この水と大氣のただなかにゐると、生活のわづらひもきえ、いや、生活そのものまでが、まつ第一にそのつよい刺戟を失ひ、次にはその價值を失つてしまふのであつた。夜になるといつも海のうちには、ものやはらかな海の寢息がしづかに漂つてくる。そのそこはかとなひびきは、人の心になごやかな氣持をそそぎこみ、おだやかに邪念をおさへつけて、そこに力づよい夢をよびさますのである……

——あのう、釣道具はどこにあるんですね？——ガヴリーラが不安さうにボートのなかを見まはしながら、とつぜん訊いた。

チエルカッシはギクツとした。

——釣道具か？ そりや、この船尾とんところにあるさ。

しかし、さういつた口の下からすぐに彼は、こんな小僧ツ子に嘘をついた自分が恥しくなり、この若者の質問のおかげで、せつかくのいい氣持やたのしい想ひをぶちこはされてしまつたのを

残念に思つた。で、彼はすつかり腹をたててしまった。いつものあの鋭い怒りの感情が、胸のなかでぎりぎりともえあがり、咽喉もとにこみあげてきた、そして彼はもつたいぶつた、いかめしい口調で、ガヴリーラにいつた。

——手前は、ただそこにさうやつて坐つてりやいいんだ！ 要らざるところへ鼻をつつこむもんぢやねえ！ 手前は漕ぎ手に雇はれたんだから、漕いでさへりやいいんだ。餘計なところへ、つべこべ口だしをしやがると、ろくな目にはねえぞ！ いいか、わかつたか？

ボートはちよつとぐらついで、止まつてしまつた。櫂がごぼごぼと泡をたてて、水のなかにとまり、ガヴリーラは腰掛のうへで、不安げにもぞもぞやつてゐた。

——漕げ！

するどい叱咤が、あたりの大氣をふるはせた。ガヴリーラは櫂をもちなほして、漕ぎだした。ボートはまるでびつくりしたやうに立ちなほり、ざぶざぶと水を切つて、神経質にゆれながら、ぐいぐいと進んでいつた。

——もつと静かにやれ！……

チエルカッシは舵をにぎつたままで、船尾から腰をうかせ、冷たい眼ざしで、ガヴリーラの蒼ざめた顔を刺すやうににらみつけた。背中をまるめて、前にここんだ彼の姿勢は、いまにも獲物

にとびかからうとしてゐる猫そつくりであつた。ぶきみな歯ぎしりの音と、なにか骨と骨とがガチガチぶつかりあふやうな音が、きこえた。

——だれだ、さわいでるのは？——海上から、荒つばい叫びごゑがとんできた。

——ふん、畜生め、漕げつたら！……もつと静かにさ！……たたつ殺すぞ、この野郎！……さ

あ、どしどし漕げ！……お一、二ツ！ おい、何とかいへよ！……のすぞ、この野郎！……

チエルカッシはしわがれ聲でわめきつづけた。

ああ、神さま……聖母さま……——ガヴリーラは口のなかでつぶやいた。彼は身體ぢゆうがが

たがたふるへ、疲れと恐しさとのあまりに、腕の力がすつかりぬけてしまつた。

ボートはすうつと旋回して、色さまざまの燈火がむらがり集り、櫓が林立してゐるのがみえる港の方に、またひきかへしていつた。

——おい！ だれだ、さわいでるのは？——また前の聲がきこえてきた。

けれどこんどはもつはじめのときよりも、ずつと遠くにきこえた。チエルカッシはやつとホツとした。

——騒いでるのは、そつちぢやねえか！——彼は聲のする方にむかつてどなつた、さうしてからガヴリーラの方にむきなほり、前よりもいつそう聲をひそめて言つたものである。——おい、

兄弟、お前は運のいい野郎だな！もしあいつらに追ひかけられでもしてみろ、お前はもうおしめえだつたんだぜ！わかつたか？そんなことになりや、おれあすくにお前を、海んなかへ突きおとしちまつたらうからな！……

チエルカッシはもうすつかりおちついてしまつて、人のよささうな調子さへまじへて話すやうになつたのに、一方ガヴリーラの方は、ますます恐れおののいて、口のなかでぼそぼそとつぶやいてゐるのであつた。

——なあ親方、おらをもう放しておくんな！お願ひだから、放しておくんな！どこへでもいいから、舟をつけておくんなすつて！なあ、早くさ！……あーあ、おらあもうこれで、一生が臺なしになつちまつた！……ほんとにお願ひだから、かはいさうだと思つて、おらを放しておくんな！おらあお前さんには何の役にもたちやしねえぢやねえか！おらにや、こんなこと、とてもできねえです！……おらあ、いままでに、こんな仕事をやつたことねえんだものな……こんどがはじめてなんだ……ほんとにさ！あーあ、おらもたうとうこんなとこまで落ちこんぢまつたのかなア！兄貴、お前さんはなんだつて、このおらをだまくらかしたんだね？え？罪だぜ、お前さん！……おかげでおらあ、魂をすつかり汚しちまつたんだものな！……あーあ、えらいことになつちまつた……

——それがどうしたつてんだ？——チエルカッシがぞんざいな口調で訊いた。——え、おい？それがどうしたつてのさ？

相手の若者が恐がつてゐるありさまが、かへつて彼をよろこばせた。ガヴリーラがびくびく震へてゐるのに、自分は平氣な顔で傲然としてゐるのが、チエルカッシには得意であつた。

——こんな後くれえことは、おらあ嫌だよ、兄貴！……お願ひだから、おらを放しておくんなよ！……おらあ何にもお前さんの役には立ちやしねえぢやねえか？……え？……たのむからさ、

親方……

——うるせえ、だまつてろ！役に立たなきや、おれあお前を連れてきやしねえ！わかつたか？わかつたら、だまつてろ！

——あーあ、よわつたなア！——ガヴリーラが溜息をついた。

——くよくよするな！……おれのいふことをきいてさへりやいいんだ！——チエルカッシがしかりつけた。

けれどガヴリーラはもうどうしてもこらへきれなくなつて、腰掛のうへでもぞもぞやつて、鼻をぐすぐすいさせてゐたが、たうとうくすくすんと嘔りあげて、泣きだしてしまつた、そしてもうどうにでもなれといつた自棄くそな調子で、ぐいぐいと漕いだ。ポートは矢のやうに走つて



いつた。行手にまたくろくろとした大きな船體がいくつもあらはれた。ボートはたちまちそのあひだに呑みこまれ、そのせまい水路を獨樂のやうにくるくるとまはつていつた。

——おい、野郎、いいか！ だれかに聲をかけられても、だまつてるんだぞ！ 命が惜しかつたらな。いいか、わかつたか？

——はあ、わかつてるです！……——チェルカッシのぶつきらぼうな命令に答へて、ガヴリーラは絶望的な溜息をつき、情なささうにつけ加へた。——あーあ、これでおらの一生も臺なしになつちまつた！……

——ぐづぐづいふな！——チェルカッシがきつぱりといつた。

ガヴリーラはその聲をきくと、急にもう何も考へる力がなくなつてしまひ、なにか冷い不安な豫感にとらへられて、まるで生きた心地がなくなつた。彼はただ機械的に櫂を水にいれては、ぐいと後ろにひき、それをもちあげては、前にまはして、また水にいれては、ぐいと後ろにひく……といふ動作をくりかへしてゐた、そしてもう強情にずつと自分の足さきばかり見つめてゐた。眠むさうな波の音がいつのまにか、ざわざわした恐しいひびきにかはつた。防波堤についたのだ……花崗岩の石垣のむかふに、人聲や、水のバチャバチャはねかへる音や、鼻唄や口笛がきこえた。

——止めろ！——チェルカッシがささやいた。——櫂をすてろ！ 石垣につかまれ！ もつと靜かにやるんだ、馬鹿め！……

ガヴリーラはつるつるした石に両手でしがみつき、石垣にそつてボートをすすめていつた。ボートは、石の上にたまつた水垢を舷でこすりながら、音もたてずにうごいていつた。

——よし、止まれ！……さあ、櫂をよこせ！ こつちへよこすんだ！ それから、お前の旅券はどこにある？ 袋んなかか？ それちや、その袋をよこせ！ はやく、よこすんだ！ お前にずらかられると困るんでな！……かうしておきや、ずらかるわけにはいくめえ。櫂がないだけなら、なんとでもしてずらかれるだらうがな、旅券がなきやどうにも仕様がねえだらう。だから、まあおとなしく待つてろよ！ それから、いいか、お前が聲をたてたりしやがったら、海の底へたたきこんでくれるからな、そのつもりでゐろよ！

さういつておいてチェルカッシは、なにかに手をかけると、するすると上にのぼつていつて、たちまち石垣の上に姿をけしてしまつた。

ガヴリーラは全身がふるふる震へてゐた……これはアツといふまの出来事であつた。彼は、あの長い口髭をのばした、やせた泥棒のまへにゐるときに感じてゐた、あのおもぐるしいやうな、恐しいやうな、いやな感じが、急に自分の肩からすべりおちてしまつたやうな氣がした……逃げ

るなら、いまだ！……そこで彼は、はじめて胸いつばいに息をすひこみ、ぐるりとあたりを見まはした。左手には、櫓のないくろい船體がそびえてゐた——それは大きな墓かなんぞのやうに、人けがなく、がらんとしてゐた。波がきてその舷側をうつごとくに、ふかい溜息に似た、陰鬱なもののわびしい反響がおこつた。右手には、びつしよりぬれた防波堤の石垣が、冷たい大きな蛇のやうに、水の上にながくのびてゐた。うしろには、やはりくろい船體のやうなものがたくさん見え、前方には、そのお墓のやうな船の舷と石垣とのあひだから、だまりこくつた、うらさびしい海面がみえた。海のうへには、どす黒い雨雲がむらがつてゐた。その巨大な、いかにも重さうな雲の群は、のろのろと空をうごいていつた。それは闇のなかから何かおそろしいものをひきだしてきては、その重い圖體で人間のうへにのしかからうとしてゐるやうに見えた。なにもかもが冷たく、くろくろとしてゐて、ぶきみであつた。ガヴリーラは恐しくなつてきた。この恐しさは、あのチエルカッシからうけた恐しさなぞとは比べものにならないほどに、底のしれないものであつた。それはつよい腕で、ギユウギユウとガヴリーラの胸をしめつけた。彼は小さく身をちぢこめて、ふるふる震へながら、ボートの腰掛にしがみついてゐた……

あたりのものはすつかり沈黙してゐた。海の溜息のほかには、なんのものの音もしない。雨雲はあひかはらずのろのろと、ものうげに空を這つてゐた。けれどそれは少しづつ、だんだんに空にせりあがつてきて、いまではもう空をながめると、空が海みたいに見えるのであつた。眠りにおちた、しづかな、なだらかな海のうへに、あれ狂ふも一つ一つの海がさかさにかかつてゐるのであつた。雲の群は、白髪頭をふりみだしたやうな波がしらをたてて地上めがけて突進してくる波にも似てをり、また風がそれらの波を吹きたててくる、その源の深淵にも似てをり、狂暴と憤怒の青い泡にまだつつまれてゐない、うまれたばかりの波にも似てゐた。

ガヴリーラは、この夜の闇の静けさと美しさにおしつぶされてしまひさうな気がした、そして一刻もはやく親方の顔がみたくなつた。ああ、もし自分がいつまでもここに放つたらかされてゐることになつたら、どうしよう？……時の歩みはのろかつた、空を這つてゆく雲の歩みよりも、もつとのろかつた……そして、この静寂は、時がたつにつれて、ますますぶきみになつてきた……だが、そのとき、防波堤の石垣のむかふで、パチャパチャと水音がし、人の氣配がして、なにかささやき聲のやうなものがきこえた。ガヴリーラは、いよいよもうおしまひだと観念した……

——おい！ 眠てゐるのか？ これをとつてくれ！……氣をつけてだぞ！……—— チエルカッシのうつろな聲がきこえてきた。

石垣からなにか四角な、おもいものがおりてきた。ガヴリーラはそれをうけとつて、ボートのなかにおろした。すると同じものが、もう一つおりてきた。それから、チエルカッシのひよろな

がい身體が、石垣をつたはつて這ひおりてきた。權もどこからか出てきたし、例の頭陀袋もガヴリーラの足もとにおちてきた。チェルカッシはありがたい息づかひをして、船尾に腰をおろした。

ガヴリーラは彼の顔をながめて、おづおづと、しかし嬉しさうに笑ひかけた。

——くたびれたかね？——彼が訊いた。

——うん、少しばかりな！ さあ、それぢや、しつかり漕いでくれよ！ ありつたけの力をだして漕いでくれ！ いい稼ぎになつたぞ、兄弟！ これで仕事は半分すんだ。あとは見張りの奴どもの眼をかすめて、漕ぎぬけていけばいいんだ。さうすれや、お金をたんまりふところへ入れてさ、マーシカんとこへでも何でも歸つていけるつてわけさ。お前にだつて、マーシカとか何とかいふ好きな女ツ子があるんだらう？ ええ、おい？

——そんなもの、ねえです！——ガヴリーラは、胸を鞆のやうにふくらませ、兩腕を鋼鐵のバネのやうにはたらかせて、一所懸命に漕いだ。ボートの底で水がごぼごぼと音をたて、船尾のあとには、くるときよりも幅のひろい水尾が青くのびてゐた。ガヴリーラは全身汗びつしよりになつたが、なほも腕のつづくかぎり漕ぎつづけた。今夜はあんな恐しい氣持を二度も味はつたので、もうこれつきりで御免だと思つた、そしていま心のうちにある望みといへばただ一つ——一刻も早くこんないやな仕事はおしまひにして、陸にあがり、自分が本當にころされたり、牢屋にぶち

こまれたりしないうちに、この男から逃げさりたい、といふことであつた。彼はチェルカッシとはもう一言も口をきくまい、むかふのいふことにはけつして逆らはず、いひつけられたとほりに何でもしてやらうと心をきめた、そしてもしうまい工合に彼と手をきることができたなら、明日はさつそくニコライ聖者のまへにいつて、懺悔の祈りをあげることしようと思つた。熱心なお祈りの言葉が、いまにも彼の胸からあふれでさうになつてゐた。けれど彼はそれをおさへつけ、汽罐のやうにハッハッと喘ぎながら、だまりこくつて、ときをり上眼つかひにチェルカッシの方をじろりじろりとながめるのであつた。

ところがチェルカッシの方は、ひからびたやうな、ひよろ長い身體を前こごみにして、飛びたとうとする鳥のやうな恰好になり、曠野の大鷹のやうな鋭い眼ざしでボートの行手の闇をじつと見つめて、慄悍な鉤鼻をひくひくさせ、片方の手で舵の柄をしっかりとにぎり、もう片方の手で鬘をひつばつてゐた。微笑が、その鬘をふるはせ、彼のうすい唇をひんまげた。チェルカッシは仕事があまくいつたので大御機嫌で、自分にも、また自分にひどくおどかしつけられてまるつきり奴隷みたいになつてしまつてゐるこの若者にも、すつかり満足してゐた。彼はガヴリーラが一所懸命になつて漕いでゐるありさまを見ると、ちよつとかはいさうになり、なにかいつて元氣をつけてやらうと思つた。

——おい！——ニヤリと笑ひをつかべながら、彼はしづかにいつた。——どうだ、ちよいとびつくりしたらうが？ え？

——な、なんでもねえです！……——ガヴリーラが吐きだすやうにいつた。  
——もうそんなに一所懸命で漕がなくてもいいよ。まあ一息つけ。あと、もうひとところ關所を通りぬけりやいいんだからな……一休みしていくさ……

ガヴリーラは、いはれるままに漕ぐ手をやめて、ルバーシカの袖で顔の汗をぬぐひ、また櫂を水におろした。

——おい、しづかに漕いでくれよ。水音をたてねえやうにしてな。もう一つ關所を越さなきや  
~~なねえんぞか。~~もつとしづかにさ……やつらは耳をとがらせて、一所懸命に見はつてけつかるだからな……~~見つかつたが最後、~~鐵砲をぶつばなされるかもしれねえんだぜ。そいつを眞向からくらすたら、~~グウ~~グウも~~あり~~ありやしねえやな。

ボートは、いまはもうほとんどなんの音もたてずに水の上をすべつていつた。ただ櫂のさきから青く光る滴りがたれ、それが水面におちると、おちた場所に一瞬間、おなじやうな青い光がきらりとかがやくのであつた。夜はいよいよ暗く、しづまりかへつてきた。空ももう、あれ狂ふ海のやうな姿ではなくなつた。雨雲がいちめんひろがり、なだらかな、重さうな帳で空をおほひ、

海上にひくくたれさがつて、じつと動かないであつた。海も、まへよりいつそう暗黒になり、静かになり、生あたたかい、鹽つからい匂ひをますますつよく放ち、そしてもうまへほどにひろびろとした感じがなくなつてきた。

——うむ、これで雨になつてくれると申し分ねえんだが！……——  
——さうすりや、おれたちはまるで幕のかげをいくやうなものだからな。

ボートの右手にも左手にも、黒い水面のうへに、なにか建物のやうなものが見えてきた。それは、そこにもやつてじつと動かないでゐる傳馬のくろくろとした姿であつた。その一つの傳馬の上で、灯がうごいてゐるのが見えた。だれかがランプをもつて歩いてゐるのだ。波が、その舷を洗つて、訴へるやうな、ぼんやりとした音をたてた、すると傳馬の方でもそれに答へるやうに、冷い陰氣な反響をかへした。それはまた、波がどんなに挑みかかつてきても、自分の方は一步もゆづらないと言ひ張つてゐるものやうにも聞えた。

——おい、警戒線だぞ！……——  
——チェルカッシが、きこえるかきこえないぐらゐの聲でささやいた。

彼がガヴリーラにもつとしづかに漕ぐやうにと命じた瞬間から、ガヴリーラはまたもや、なにかを待ちうけるやうな激しい緊張にとらへられてしまつたのだ。彼は全身を眼のまへの闇のなか

にのりだした。彼には、自分の身體がぐんぐんとびてゆくやうに思はれた。骨と血管とが疼くほどにピンと張りきり、頭はただ一つの考へでいつぱいになつてつきづきといたみ、脊中の皮膚はひくひくと痙攣し、足には小さな、とがった、冷たい針が何本もつきささつたやうな氣持であつた。眼は、暗いところをあまり一所懸命にみつめてゐたので、きりきりといたんだ。彼には、その闇のなかから、いまにも何物かがヌツと姿をあらはして、「待てッ、泥棒め！」とどなりつけるやうな氣がしてならなかつた。

いまチエルカッシが「警戒線だぞ！」とささやいたとき、ガヴリーラは思はずギクリとしたのだ。鋭い、火のやうな衝動がサツと全身を走りぬけた、さうしていままでだらけてゐた神経をピンと緊張させた。大聲をあげて、助けをもとめなくなつた……彼はもう口をあげ、腰をうかせ、胸をはつて、大きく息をすひこんだ、そしていまにも叫び聲をあげようとした、がその瞬間ふいに、咎でひつばたかれでもしたやうに、はげしい恐怖におそはれ、眼をつぶつて、腰掛からすべりおちた。

……ボートの行手にあたつて、はるか水平線のあたりに、青くもえさかる、すばらしく大きな火の劍が、くろい海の水のなかから、サツと突立ちあがつた。さうして、夜の闇をきりさき、その切尖で空をおほふ雨雲をスーッと撫でて、海のとこに倒れかかり、幅のひろい青い帯のや

うになつて横たはつた。それが横たはると、ちやうどその光の帯にあたるところには、闇のなかから、それまで見えなかつたたくさんの船のすがたがあらされた。やはらかな夜の闇につつまれて、だまりこくつてゐる、黒くろとした船のすがたであつた。それは、はげしい嵐に難破して、ながいこと海の底にしづんでゐたのが、いまこの海からうまれた青い火の劍の命令によつて、浮びあがつてきたのだ。大空だとか、そのほか海面にあるすべてのものをながめるために、浮びあがつてきたのだ——そんな風におもはれた。それらの船では、索具が櫓ユスにからみついてゐて、海の底からいつしよにあがつてきた昆布かなんぞのやうにみえた。それは、まるで網でもかぶせられたやうに、その大きな船體をぐるぐるまきにしてゐるのであつた。やがてこの恐しい青い火の劍は、また海面から立ちあがり、つよい光をきらめかせながら、ふたたび夜の闇をきりさいて、また別の方向に倒れていつた。そしてそれが横たはつたところには、やはり前とおなじやうに、それまで姿のみえなかつた船體が、てらしたされるのであつた。

チエルカッシのボートはそこで止つてしまつて、まるで途方にくれたやうに水の上でためらつてゐた。ガヴリーラは、両手で顔をおほつて、ボートの底に這ひつくばつてゐた。チエルカッシはそれを足でこづいて、ぷりぷりしながら、しかしひくい聲で、どなりつけた。

——馬鹿野郎、税關の巡視船ぢやねえか……ありやその探照燈さ……さあ、起きろ、でくの

坊め！あの探照燈がこんどはこつちへ向つてきさうぢやねえか！……あれに見つかつてみる、おれもお前おまえもおしまひなんだぜ、おい！しつかりしろい！……

たうとう最後に彼は長靴の踵で、猛烈なやつを一つガヴリーラの脊中にドスンとくらはせたので、やつとガヴリーラは身をおこし、それでもまだ恐こわくて眼があげられず、腰掛こぶに坐つても手さぐりで權をつかんで、漕ぎだしたのであつた。

——もつとしづかにやれ！たたき殺すぞ、この野郎！しづかにやれつたら！……なんて馬鹿野郎なんだ、手前てまえは！……なにをさうびくびくしてやがるんだ？え、おい？このヒヨツトコめ！……ありや、ただの探照燈ぢやねえか。もつとしづかに漕げつたら！……まぬけ野郎め！……ああやつて、密輸入者を見張つてるのさ。どうやら、こつちはもう大丈夫らしいぞ。ずうつとむかふの方へいつちまつたからな。もう心配することはねえや、助かつた、助かつた。もう占めたもんだ……——チェルカッシは勝ちほこつたやうに、あたりを見まはした。——すつかり、むかふの方へまはつちまつたな！……フフフ！……おい、このおたんこなすのでくの坊め、手前てまえもよつぼど運のいい野郎だな！……

ガヴリーラはだまつて漕いでいつた。そして、荒い息をはきながら、あのおそろしい火の劔がまだしきりに立ちあがつたり、倒れたりしてゐるあたりを、ちらりちらりと横眼でながめた。彼

は、チェルカッシのやうに、それを單なる探照燈の光だと思ひこむことは、どうしてもできなかつた。闇をきりさき、海面を銀色にかがやかせる、あの冷い、青い光は、なにかしら説明することのできない不可思議な力をもつてゐるやうに思はれた。ガヴリーラはまた、おもぐるしいやうな、おそろしいやうな、一種の催眠状態におちていつた。彼はただ機械的に漕いでゐた。いまにも頭上になにかものすごい一撃でもきさうな氣がして、ますます身體をちぢこめ、もはや彼の心にはなんの望みも、なんの考へもなくなつてゐた——まるで、魂のぬけた人間のやうにポーンとしてゐるのであつた。この夜の激動が、たうとう彼の身體から、すつかり生氣を吸ひとつてしまつたのだ。

ところがチェルカッシの方は、意氣揚揚たるものであつた。いろんな冒険に慣れつこになつた彼の神経は、もうすつかりおちついてしまつてゐた。ながい口髭が氣持よささうにふるへ、双眼まなこにはちらちらと小さな火がもえてゐた。彼は自分が偉いものになつたやうな氣がし、唇をとがらせて口笛をふき、しめつぽい海の空氣をふかふかと吸ひこみ、ひとわたりあたりを見まはし、ガヴリーラのうへに眼をとめると、人のよささうな微笑をうかべた。

風がでてきて、眠つてゐた海をゆりおこし、ふいに清らかな小波をたてはじめた。雲はさつきより薄く、透明になつてきたやうに思はれたが、そのかはり今はもう空をすつかりおほつてゐた。

さう強い風ではないけれど、とにかく風が思ひのままに海の上をふきまくつてゐるのに、空の雲はちつともうごかない。まるで何か気がかりなことでもあるらしく、陰鬱なもの思ひにしづんでゐるといつた様子であつた。

——おい、兄弟、もうそろそろしつかりしろよ！　いつまで、そんな不景氣な面してやがるんだ？……まるで身體ちゆうから生氣をすつかりしほりとられちまつてさ、いまぢや皮が骨をつつんでるだけでございますつてやうな顔をしてやがるぢやねえか！　もう仕事はすつかりおしまひになつたんだつてことよ、おい！……

ガヴリーラには、たとひチエルカッシの聲でも、とにかく人間の聲を耳にするのが、やはり氣持がよかつた。

——ああ、さうかい。——彼はしづかにいつた。

——おい、おい！　仕様がねえなア、この頓馬め！……それぢや、お前が舵をとれ、おれが少しかはつて漕いでやらあ。お前、くたびれたんだな、まあ一休みしろよ！

ガヴリーラは機械的に位置をかへた。チエルカッシは席をかへるときに、相手の顔をながめ、相手の膝ががく震へ、足もとがふらついてゐるのをみとめると、急にこの若者がかはいさうになつてきた。彼は若者の肩をボンとたたいてやつた。

——おい、さうびくびくするもんぢやねえやな！　いい稼ぎになつたんだぜ。なあ兄弟、お前にもたんまり分け前をやらあ。どうだい、二十五留紙幣がほしかねえか？　え？

——おらあ、何にもほしくねえ。ただ、早く陸へあげてもらひてえです……

チエルカッシは手をふつて、ベツと唾をはいて、漕ぎだした——ながい手で櫂をにぎつて、おもひきり大きく水をかきながら。

海は眠りからさめた。それはあとからあとからと小波をたて、總のやうな泡でその縁をかざつた。小波は、おたがひにぶつかりあつては、埃のやうにこまかな飛沫をとばせた。泡は、ざわざわと溜息をついては、きえてゆく。あたりには、氣持のいい波のざわめきが、いつばいにたちこめた。夜の闇までも、活氣づいてきたやうであつた。

——おい、どうだい？——チエルカッシがいひだした。——お前はこれから村へ歸えつて、女房をもらつて、畑を耕し、麥を蒔いて、百姓をはじめようつていふんだらう。ところが、女房は次から次へと餓鬼を生む、食ふものは足りなくなる、さうしてお前は一生あくせくしてゐるつてえことになる……ふん、どうだい？　それでいつたい、なんの楽しみがあるつてんだ？

——そらあ、楽しみはあるです！——ガヴリーラはまだ震へながら、おづおづと答へた。  
風がそちこちの雲をふきちらし、その雲のすきまから、星を一つ二つひからせた碧い空がちら

りとのぞいた。あそびたはむれてゐる海に姿をうつしたその星屑は、波といつしよにはねあがつて、サッと姿をけしたかと思ふと、いつのまにかまたきらきらと波間にかがやいてゐた。

——もつと右へまはせ！——チエルカッシがいつた。——もうぢきだぞ。おい、やつとまあ、これでおしまひだ！……大仕事だつたな！ どうだい、おい、わかつたか？……今夜ひとばんで、五百留キナプリがとこ稼いできたんだぜ！

——五百留？！——ガヴリーラは、とてもほんととは思へないといふやうな調子でくりかへした。そしてひどくびつくりして、ポートのなかにある包みを足でおしこくりながら、急ききこんで訊いた。——それぢや、こらあいつたい何なんですわね？

——そりや金目のものさ。まともに賣りや、たつぷり千留キナプリには賣れる品物よ。しかし、おれあそんな高いことはいはねえ……どうだ、うまいもんだらう？

——ああ……——ガヴリーラは、よく胸におちないらしく、生返なま事をした。——もしおらにそれだけの金があつたらなア！……——彼は、村や、自分のまづしい暮しや、母親のことや、それから、そのために自分がかうして出稼でせぎにでて、今夜もこんなへとへとなつて働らいてゐる、あの遠い故郷にのこしてきた、さまざまの親しいものことなどを、ふと思ひだして、溜息をついた。谷底をながれてゐる小川にむかつて駆けくぐるやうな工合に、けはしい山の峽に陣どつて

ゐる自分の村、白樺や白楊やななかまどや櫻桃おうとうの木木につつまれた故郷の村の思ひ出が、波のやうに彼をつつんだ。——さうしりや、大したもんだがなア！……——彼は悲しげに、ふかい溜息をついた。

——なるほど！——さうすると、お前めえは、これからすぐに汽車にのつて、家へ歸かへえらうつてつもりなんだな……家へ歸かへえりや、村ぢゆうの娘どもが大騒おどろきをする、豪勢なもんだ！……お前めえはそのなかから、よりどり見どりつてわけだからな！ それから、家もおつ建てるし……いや待てよ、家をたてるにや、金がすこし足りねえかな……

——はあ、とても足りねえですよ、家をたてるにやな……なにしろ、わしらの方ぢや材木が滅法高いんで。

——ふうん、それぢやどうするかな！ 古い家に手を入れるつてことにするか。馬はどうだ？ あるか？

——馬かね？ 一頭あることはあるだが、もう年寄で、よぼよぼになつちまつてけつかるだ。

——さうか。それぢや馬も要るわけだな。いいやつを一頭と、な！ それから、牛と、羊と、家ど禽のりもいろいろ要るな……どうだ、え？

——もうたくさんです！……あーあ、お前めえさん、ただ口さきだけでそんなこと言つたつて！……



…おらあ、本當にそんな暮しを、一度でいいからしてみてえなア！

—おい、兄弟、ところがな、そんな暮しをしてみたところで、結局なんにもなりやしねえんだぜ……そこんとこの條理は、おれにもよくわかつてる。おれだつてな、これでも昔は、ちやんとした自分の時をもつてたもんさ……親父の代までは、村でも指折りの身代だつたんだから……チエルカッシはゆつくりと漕いでいつた。ボートは、いたづらつ子のやうに舷にたはむれかかる波にゆられて、動くともおもへないほどにゆつくりと暗い海の上を動いていつた。すると海はいよいよ調子にのつて、ふざけかかつてきた。二人の男は、水の上でゆらゆらゆれながら、もの思はしげにあたりを見まはして、夢想にふけつてゐた。チエルカッシは、ガヴリーラの心をいくらかでもおちつけ、元氣つけてやらうとおもつて、田舎の話なぞをはじめたのであつた。だからはじめのうちは、彼は口髭のあたりに皮肉な笑ひをうかべながら語つてゐたが、だんだんに話すすむにしたがつて、彼はずつと以前にふりすててきた村の百姓の生活の楽しかつた日目のことどもを、自分でも思ひだしてきたのであつた。いままで忘れてしまつてゐたことが、ふつといま思ひうかんできたのだ。彼はだんだんに話に身が入り、もう若者に村のことや村のいろんな出来事なぞをきくのも忘れて、いつのまにか、ただもう自分で自分のために語りつづけてゆくのであつた。

—百姓の暮しで、いちばん大切なものは、なあ兄弟、そりや自由だ！　いいか、お前は自分の主人なんだぜ。お前は自分の家をもつてゐる。そりや二束三文のものかもしれねえが、それでもやつぱり自分のものだ。それからお前は地所をもつてゐる。猫の額ほどの地所かもしれねえが、やつぱりそれは自分の土地だ！　その土地の上では、お前は王様なんだ！……そして、お前はちやんとした體面をそなへてゐる。だからお前は、だれからだつて尊敬をうける権利があるんだ……さうぢやねえか？——チエルカッシはすつかり感動してしまつて、言葉をきつた。

ガヴリーラは、ものめづらしさうに相手をながめてゐたが、自分もやはり感動してゐた。彼はその話をきいてゐるうちに、自分の相手がだれであるかを忘れてしまひ、自分の眼のまへにゐる人は、ちやうど自分とおなじやうに、多くの祖先たちが流した汗によつて永久に土地にしばらくけられてゐる百姓であり、子供のころの思ひ出によつて故郷の村とむすびついてゐる百姓であると思ひこんでしまつてゐた。そしてその人は勝手に故郷の村をはなれ、村のことなどはすつかり忘れてしまつたので、いまはその當然のむくいをつけてゐるのだと思つた。

—うん、兄貴、さうだよ！　ほんとにそのとおりだ！　いまのお前さんみてえに、土地からはなれちまつてる者の身の上を見りや、いちばんよくわかる！　土地つてものは、なあ兄貴、まるで阿母みてえなもんで、いつまでたつたつて忘れられるもんぢやねえんだ。

チエルカッシは、ハッとわれにかへつた。彼は自分の自尊心を——さうだ、向ふみずな勇士の自尊心をだ——だれかにきつづけられたときに、いつもきまつて感じる、あのいらだたしい思ひ——それは、相手のごくつまらない人間だと思つてゐる奴の場合には、ことさらにはげしかつたが——それがいま胸のなかに、じりじりと燃えあがつてくるのを感じた。

——うるせえ！……彼はしわがれごゑでどなつた。——手前は、おれがあんなことをみんな本気でいつてゐたと思つてゐるのか……あんまり人をなめるなよ！

——お前さんつて、をかしな人だな！……——ガヴリーラはまた怖ぢけづいてしまつた。——おらあ何もお前さんのこといつたわけぢやねえですよ。お前さんみてえな人は、ずるぶん多勢ゐるんだものな！ どうしてこの世の中にや、不仕合せな人が、こんなに多勢ゐるんだらうな？……さうしてさ、その人たちはみんな浮浪人の仲間に入つてゐる……

——おい、小僧、かはつて漕げ！——チエルカッシは、猛烈な悪罵が咽喉もとまでこみあげてきて、いまにもどつとあふれでさうになるのを、なぜかくつとおさへつけて、言葉みじかに命令した。

二人はまた席をかへた。チエルカッシは、荷物をまたいで相手といれかはるときに、ふとガヴリーラをどんと一突きついて、水のなかに突きおとしてやらうかといふ氣持が、胸のなかでうづうづしてゐるのを感じた。

二人の簡単な會話はそこでとぎれた。けれど、もういままでは黙つてゐても、ガヴリーラの身體からは田舎くさい匂ひがふんふんと發散して、それがまともにチエルカッシのところに吹きつけてくるのであつた……チエルカッシは、ボートの舵をとるのも忘れて、過ぎさつた日のことを思ひだしてゐた。ボートは波のまにまに、どこもしれず沖の方へと漂つてゆくのであつた。波も、このボートが目標を失つてしまつてゐるのに氣づいたらしく、いよいよ高くそれをゆすりあげては、輕やかにたはむれかかつた。權をいれると、そこだけが青く、やさしく光つた。だが、チエルカッシの眼のまへには、過去のさまざまな情景がめまぐるしく浮んでくるのであつた——十一年の浮浪人生活といふ厚い壁によつて、現在とはつきりへだてられてゐる、とほい過去の思ひ出だ。彼は自分の子供のころのことを、自分の村を、母親を、思ひうかべた。母親はまつ赤な顔をした、でつぶりふとつた女で、いかにも人のよささうな灰色の眼をしてゐた。父親の姿も思ひ出した——彼は赭鬚の大男で、いつも不愛想な顔をしてゐた。それから花髻になつたときの自分の姿がうかび、女房になつた黒い眼のアンフィサの姿がうかぶ——ながい下げ髪で、むつちりとした肉づきの、快活な女であつた。するとまた、近衛の聯隊に入つてゐたころの好男子だつた自分の姿がうかぶ。つづいてまた父親の姿——けれど、こんどはもう長い勞苦に脊中もまがり、すつ

かり白髪になつてしまつてゐる。土をなめるほど腰のまがつてしまつた、皺だらけの母親の姿もうかんできた。つぎには、彼が兵隊からかへつてきたときの村のありさまを思ひだした。父親は伴のグリゴリイを村ぢゆうのものまへに自慢してゐた。彼はながい口髭をはやし、實に健康さうな、きびきびとした好男子の兵士であつた……不合せなものにとつては、まるで笞のやうなはたらきをする、この記憶といふやつは、過去の石塊いしくわいにさへも生命をふきこみ、かつて飲みほした毒液にさへも甘い蜜をたらしこむのである。

チエルカッシは自分が、心をなごやかにするやうな優しみのこもつた過去の親しい息吹につつまれてゐるのを感じた。その息吹のなかには、やさしい母親の言葉もきこえれば、着實一方の百姓であつた父親のやかましい文句もきこえたし、そのほか忘れてゐたさまざまの物音もきこえた。それからまたそこには、雪がとけたばかりのころの大地や、すきかへされたばかりの大地、秋蒔麥が青い絹をしきつめたやうにきれいに芽をだしたころの大地の、むんむんするやうな匂ひがいつばいにこもつてゐた……彼はそのやうな世界からは、すつかり切りはなされ、放りだされてしまつて、いまはまつたく孤獨の身であるのを感じた——彼の血管のなかをながれてゐる血潮は、さういふ世界から生れてきたものなのに。

——おい、親方！ どこへいくんだね？——ガヴリーラがとつぜん訊いた。

チエルカッシはびくつとして、鷹のやうに鋭い眼でそわそわとあたりを見まはした。

——チョツ！ とんでもねえとこへ來ちまつた！……仕様がねえ、もう一息漕いでくれ……

——なんか考へこんぢまつてたんだね？——ガヴリーラは微笑をうかべて、いつた。

——うん、すこし疲れた……

——ぢや、何ですかい、今日はもう、こいつを金にする當あてはねえつてわけで？——ガヴリーラは四角な包みを足で突ついた。

——なあに、心配するな……すぐに賣りつばらつて、金にしてやるわ……大丈夫だい！……

——五百五百留留んなるですかい？

——うん、まあ少く見つもつてもな。

——ほんとに、そんなになるもんかな？ もしおらの手にそんな大金が入いえつたらなア！ さうすりや、おらあそいつを抱いて、をどりだしちまふぜ！……

——どこまでも百姓くせえこといつてやがらあ！

——それだけありや、おらあもう澤山だ！ さうすりや、おらあもうすぐに……

そしてガヴリーラは、たちまち空想の翼をひろげるのであつた。けれどチエルカッシはだましくくつてゐた。そのながい口髭はだらりとたれ、右半分は波のしぶきにぬれて、びつしよりにな

つてゐた。眼はふかくおちくぼんで、いつもの輝きをうしなつてゐた。よこれたルバーシカの壁にまでもやどつてゐるやうに思はれる、謙讓な物思ひの影が、彼の身體にあらはれてゐる例の慄悍さをすつかり掻きけしてしまひ——いまはとてもおだやかな容子にみえた。彼はぐいとポートをまはして、海面にニュートツとつきでてゐる何か大きな黒いものの方にむかつて進んだ。

空はまたすつかり黒雲におほはれ、こまかな濛い雨がポツリポツリとふつてきた。それは波のうへにおちて、氣持のいい音をたてた。

——生まれ！ しッ、しづかに、しづかに！……— チェルカッシが命令した。

ポートは、大きな傳馬の横腹に、軸をゴツンとぶつけた。

——おい、野郎ども、ねてやがるのか？……— チェルカッシは、その傳馬の鞍にたれてゐる繩のやうなものに鉤竿をひつかけて、どなつた。——梯子をおろしてくれ！……また雨がふつてきやがつたんでな、これでまあ精一杯だつたんだぜ！ おい、野郎ども、どうしたんだ！……

おーい！……

——セルカッシでねえだか？——鼻にひつかかつた變にやさしい聲が、頭のうへできこえた。

——うん、さうだ。梯子をおろしてくれ！

——おい、カリメーラ！ セルカッシがきただよオ！

——梯子をおろせつたら、おたんこなすめ！——チェルカッシがどなりつけた。

——ほオ、今日はえらく御機嫌がわりいだね……大將！

——さあ、のぼれ、ガヴリーラ！——チェルカッシは相棒をふりかへつて、いつた。

まもなく彼らは甲板にあがつた。そこには、黒い鬚をもじやもじやにはやした男が三人、妙にシュ、シュといふ音のまじつた言葉で、おたがひに何か元氣よくしゃべりながら、舷からチェルカッシのポートを見おろしてゐた。だんぶくろのやうな、長い服をきたもう一人の男が、チェルカッシのそばによつてきて、だまつて彼の手をにぎり、ガヴリーラの方をうさんくささうにながめた。

——こいつを朝までに金にしてくれ。——チェルカッシが手短かに命じた。——おれはこれから一眠入りしてくるからな。さあ、ガヴリーラ、いかう！ それとも、お前、腹がへつたか？

——おらあ眠たくつて……— ガヴリーラが答へた、そしてものの五分もたたないうちに、もうぐうぐうと鼾をかきだした。チェルカッシはそのわきに坐り、だれかの長靴を自分の足にはいてみたり、もの思はしげにわきをむいて唾をはいたり、悲しさうに口笛をならしたりしてゐた。

それから、ガヴリーラとやらんで寝そべり、腕枕をして、片方の手で鬘をひねつてゐた。

傳馬は、たはむれかかる波の上でしづかにゆれてゐた。どこかで材木がぶつかりあつて、わびしげな音をたててゐた。雨はものやはらかに甲板にふりそそぎ、波はバシバシと舷をうつつてゐる……あたりはまつたく荒涼として、すべてのものが、ちやうどわが子の將來になんの希望ももてなくなつた母親の子守歌のやうに、もの悲しい音をたててゐた……

チエルカッシは齒をくひしばつて頭をもたげ、ぐるりとあたりを見まはして、なにか口のなかでぶつぶつとつぶやいてゐたが、おきにまた横になつてしまつた……傍若無人に足をなげだして、ひつくりかへつた恰好は、大きな鉄そつくりであつた。

## 三

彼はさきに眼をさまし、そわそわとあたりを見まはしてから、やつとホッと安心し、まだ眠つてゐるガヴリーラの方をちらつとながめた。ガヴリーラは氣持よささうに軒をかいてゐた。なにか嬉しい夢でもみてゐるらしく、その陽にやけた健康さうな、子供つぼい顔いつばいに微笑をうかべてゐる。チエルカッシは溜息をついて、ほそい繩梯子を這ひあがつていつた。船艙の明り窓から、鉛色の空の一片がみえた。もうすつかり夜は明けはなれてゐたけれど、いかにも秋らしい、どんよりとして、陰鬱な日であつた。

チエルカッシは二時間ほどたつてからもどつてきた。まつ赤な顔をして、口鬘を妙な工合にピョンと上にひねりあげてゐた。彼はふかい長靴をはき、ジャケットを着、革のズボンをはいて、獵師そつくりの恰好をしてゐた。その衣裳は全部古物であつたが、しかしなかなかしつかりしたもので、彼には大へんよく似合つた。それのおかげで、彼の骨ばつた身體つきがすつかりかくれて、ひどく堂堂とした容子になり、どこか軍人らしい威嚴さへそなはつてきた。

——おい、小僧、おきろい！……彼はガヴリーラを足でこづいた。

若者ははねおきた、そしてまだ眼がよくさめないものだから相手がだれだかわからずに、びつくりして、そのとろんとした眼を見すゑてゐた。チエルカッシが大聲をたてて笑ひだした。

——なんだい、お前さんかい！……ガヴリーラもやつと相好をくづして笑ひだした。——すつかり旦那さまになつちまつたなア！

——おれたちにや、こんなことは朝飯前さ。そりやさうと、昨夜はお前も膽をつぶしたらう！——いつたい昨夜は、何度死にそこなつたかな！

——そんなこといつたつてさ、お前さん、まあ考へてみておくんさい、おらあこんな仕事や

つたのは初めてだものな！ 下手をすりや、一生を臺なしにしちまつたかもしれねえだからな！

——ふうん。で、どうだい、もう一度でかける気はねえか？ え？

——もう一度？……そんなこと、おらあ、まつびらです。さあ、何ていつたらしいかな？ つまり、そんなことしてさ、お前さん、何の益があるですな？……まつたくさ！

——それでもな、百留紙幣二枚になつたら？……

——といふとつまり、二百留になるつてわけですかい？ そんなら、かまふことはねえ……また、やつてもいいな……

——待て待て！ それぢや、お前、魂が汚れて一生を臺なしにしちまふつてのは、どうなるんだ？……

——そらあ、つまり、その……魂を汚さねえですむかもしれねえですものな！——ガヴリーラはニヤニヤ笑つた。——それで済んで、あとは一生、立派な人間として世のなかをわたつていくことができるかもしれねえですものな。

チェルカッシは愉快さうに、また大聲をたてて笑つた。

——ふうん、なるほど！ しかし冗談はまあそれくらゐにしておいて、そろそろ陸へあがらうぢやねえか……

そこで二人はまたボートにのつた。チェルカッシが舵をとり、ガヴリーラが漕いだ。頭上にはいちめんに雨雲におほはれた灰色の空がひろがつてゐた。暗緑色の海はボートをもてあそび、波がさうざうしくそれを揺りあげる。波はまだほんの小さな波で、しきりと舷にぶつかつては、おもしろさうに明るい、鹽からい飛沫をあげてゐる。ボートの行手には、はるかに砂濱が黄いろい縞のやうにみえる。華やかな白い泡にかざられた波がたちさわいでゐる海は、船尾のうしろにだんだんに遠ざかつてゆく。沖の方には船がたくさん碇泊してゐるのが見える。左手の方には、櫓が林立してをり、そのむかふには町の家家がそちこちに白くかたまりあつてゐる。そのあたりから海面にむかつて、耳を聳するばかりの騒音がながれてき、それが波のさざめきと溶けあつて、なんともいへぬ氣持のいい、力づよい音楽を奏するのであつた……やがて、うすい灰色の霧の帳があたりいちめんにおりてきて、いろんなものをお互ひにへだててしまつた……

——ほほう、こりや夜になるとひと荒れくるぞ！——チェルカッシが海面をながめて、ひとり合點をした。

——嵐かね？——ガヴリーラが二本の櫂でぐいぐいと力づよく水をかきながら、訊いた。彼は風が海からふきとばしてよこす波のしぶきで、頭の天邊から足の爪先までぐつしよりぬれてゐた。

——さうさ！……——チェルカッシがきつぱりといつた。

ガヴリーラはさぐるやうな眼つきで、相手をじつと見つめた……

——あのな、親方、あれはいつたい、いくらになつたですかね？——彼は、チエルカッシが何もいひださうな容子が無いのを見て、たうとう思ひきつて自分の方からきりだして見た。

——これだけだ！——チエルカッシはさういつて、ポケットから何かつかみだし、ガヴリーラのまへにつきだしてみせた。

色とりどりの紙幣の束がガヴリーラの眼にうつつた。それはみんな眼もまばゆいばかりの虹色にみえた。

——へえ！……おらあまた、お前さんがいいかげんなこと言つてるのだとばかり思つてたんだけど！……これで、どのくらゐあるんですい？

——五百四十留だ！

——うめえもんだなア！……——ガヴリーラは、ふたたびポケットにしまひこまれた五百四十留の紙幣束を、食ひつくやうな眼ざしで追ひかけながら、つぶやいた。——あーあ！……もしそれだけの金がありやなア！……——そして彼は、おさへつけられたやうに、ふかい溜息をついた。

——今日はひとつ、二人で豪遊しようぜ、なア兄弟！——チエルカッシは有頂天になつて叫ん

だ。——金はたんまりあらあ……心配するなつてことよ！ お前にや、ちやんとやるだけのものは分けてやるからな……四十留やらあ！ な、どうだ？ それでいいだらう？ 欲しけりや、いますぐやるぜ、どうだ？

——お前さんの方さへ都合がわるくなきや……それらも何よりで、さつそくお貰ひ申してえもんですが！

ガヴリーラは、胸をかきむしるやうな鋭い期待に、全身をふるはせてゐた。

——ハッハ！ 手前もなかなかちやつかりしてやがるな！ お貰ひ申してえ、ときたか！ それちやひとつ、貰つておくんない、だ！ どうかお納めなすつておくんない、おれの方から恭しく願ひすらあ！ まつたく、こんな大金をかついで、おれ一人ぢやどうしていいかわからねえからな！ お前はよく働いてくれたんだから、それちやまあ、これをとつておきねえ！……

チエルカッシは四五枚の紙幣をガヴリーラのまへにさしだした。若者はふるふる手でそれをつかむと、權を放りだして、さつそくどこか内懐のおくの方にしまひこんでしまつた、そして何かあつちいものでも飲んだときのやうに、さうざうしく息をすひこんで、いかにも貪婪らしい眼をばちばちさせた。チエルカッシは口ばたに冷笑をうかべて、その相手のありさまをながめてゐた。

するとガヴリーラの方は、すぐにまた權をにぎつて、俯向いたまま、まるで何かにおびやかされてでもゐるやうに、せかせかと神経質に漕ぎだした。肩と耳とがびくびくふるへてゐるのが見え

た。  
——手前も怒がふけえな！……駄目だぞ……しかし、仕様がねえか？……土百姓なものな……  
——チェルカッシが情なさうにいつた。

——そんなこといつたつて、金さへありや何でもできるですものな！……ガヴリーラは、ふいにはげしい興奮に全身をふるはせて、さげんだ。さうして、頭のなかにうかんでくる思想を追ひかけ、飛びさつてゆく言葉をつかまへようとでもするやうに、彼はせきこんで、とぎれとぎれに、金がある場合と金がない場合との村の生活を語りだすのであつた。金さへあれば、尊敬をうけ、満足して、愉快にくらしてゆけるのだ！……

チェルカッシは彼の話にじつと耳をかたむけて、ときどき何かもの思はしげに眼をばちばちやりながら、まじめな顔つきできいてゐた。その顔には、ときをり満足さうな微笑がうかんだ。

——さあ、ついたぞ！——彼はふいにガヴリーラの話の話をさへぎつた。

波がボートをのせて、工合よく砂の上におしあげてくれた。

——おい、兄弟、これですつかりおしまひだな。ボートは、波にさらはれねえやうに、もう少

しこつちへひつぱりあげといた方がいいな。さうすりや、いまにだれかとりにくらあ。ところでおれたちもこれでお別れだな！……ここから町までは七八露里だが、お前はとうする、もついでど町へ歸えるか？ どうだ、え？

チェルカッシの顔には、いかにも人のよささうな、そのくせどこか油断のならない狡さうな微笑がうかんでゐた、そして身體全體に、なにかかう自分だけにはとても面白くて、ガヴリーラになんぞは思ひもよらないことを考へてゐるといつたやうな容子がみえた。彼は片方の手をポケットに突つこんで、がさごそと紙幣の音をたてた。

——いいや……おらあ……いかねえです……おらあ……ガヴリーラはなにか咽喉にでもつまつたやうに、言葉をとぎらせた。

チェルカッシはちらりと相手をながめた。

——なんだつて、そんなへんな顔をしてやがるんだ！——彼が訊いた。

——そらあ、あの……だが、さういつただけで、あとはガヴリーラの顔がしきりに赤くなつたり、灰色になつたりしてゐるのであつた。彼は、チェルカッシの前に身をなげだしたいやうな氣持になり、さうかと思ふとこんどは、自分にはとてもできさうにないと思はれるやうなことをやつてのけたいといふ欲望にかられたりして、いつまでもひとつ所にもおちおちしてゐるのであ



つた。

この若者がそんなに興奮してゐるありさまを眼のまへに見ては、チエルカッシもさすがに平氣ではゐられなかつた。彼はこの若者の興奮がどう爆發するか、はやくそれを見たいものだと思つてゐた。

ガヴリーラは、なんだか涕泣ナリナきに似た奇妙な聲をたてて笑ひだした。彼は頭を低くたれてゐたので、顔の表情はチエルカッシにはちつともわからなかつた。ただ耳がしきりに赤くなつたり、蒼くなつたりするのが、ぼんやりと見えるだけであつた。

——ふん、仕様のねえ野郎だな！——チエルカッシが手をふつた。——手前は、なにか、おれに惚れこんぢまつたとしてもいふのか？ え？ 娘つ子みてえに、夢中になつちまつたのかよ？ ……それとも、おれと別れるのが辛いつてのか？ え、おい、小僧！ どうしたんだ？ 言つてみる！ ぐづぐづしてると、おれあもつちまふぜ！ ……

——いつちまふ?!——ガヴリーラは甲高い聲でさげんだ。

人つ子ひとりみえない荒涼とした砂濱は、その叫びごゑに身ふるひし、海の波に洗はれてできた黄いろい砂の起伏も、ゆれうごいたかと思はれた。チエルカッシもふるつと身をふるはせた。ガヴリーラはいきなり、いままで突立つてゐた場所をはなれて、チエルカッシの足もとに身をな

げだし、両手でその足をだきかかへて、ぐいと引きよせた。チエルカッシはぐらぐらとして、ドシンと砂の上に尻もちをついた。で、思はず彼はキツとなつて、ぎりぎり歯をくひしぱり、きたい拳骨をにぎつた長い手を頭上にふりあげた。けれど、ガヴリーラが恥も外聞もわすれて哀訴する聲をきくと、どうしてもその手をふりおろすわけにはいかなかつた。

——親方！ ……わしにその金をおくんなさい！ お願ひだから、それをわしに呉れておくんな！ そんな金、お前めえさんにや、何でもねえぢやねえですか！ ……だつてさ、一晩でらくに手に入えるだもの——たつた一晩でさ……ところが、おらにや五年も十年もかかる……親方、おらはお前めえさんのために、一生お祈りをします！ お前めえさんの魂が救はれるやうに、三つのお寺へいつて、一生お祈りをあげてやります！ だから、そいつをわしにおくんなさい！ ……だつてお前めえさんはその金を、湯水のやうにつかつちまひなさるんぢやねえか……ところがわしは、大切に土のなかへしまつておくです！ なあ、親方、わしに呉れておくんな！ お前めえさんにや、そんな金は何でもねえぢやねえですか？ ……それともお前めえさんにや、それがそんなに大切なんですかい？ たつた一晩で、たちまち金持になつちまふのにさ！ たまにや他人ひとのためになることも、やつておくんなさい！ なんしろ、お前めえさんはすつかりおぢふれちまつてるんだからな……お前めえさんにや、もうここから逃れでる道はねえ……だけど、わしにやまだ將來あきに望みがあるです！ だから

さ、わしにその金を呉れておくん、ね親方！

チエルカッシは砂の上に腰をおろしたまま、びつくりして、腹だたしげな眼ざしで相手を見つめた。彼は上體をうしろにのけぞらせ、腕を突張つてそれを支へるやうにして坐り、じつとおしだまつて、いつまでも恐ろしげに眼をむきだして若者をにらみすゑてゐた。ガヴリーラは、彼の膝に顔をすりつけて、ときどき息をつまらせながら、ぼそぼそとしきりに哀願をつづけてゐた。チエルカッシは、たうとう思ひきつて相手をつきのけて跳ねおきた、そしてポケットに手を突っこむと、紙幣束をつかみだして、ガヴリーラの顔にたたきつけた。

——ほれ！ 持つていきやがれ！……彼は興奮のあまりぶるぶると身を震はせて叫んだ。彼はこの慾の皮のつづばつた土百姓が、かはいさうでもあつたが、同時にまた憎くて憎くてたまらなかつた。しかし、紙幣をたたきつけてやつたら、なんだか急に自分が偉くなつたやうな氣がした。

——きさまにいはれなくつたつて、おれあ自分でもちやんと、きさまにもつとやらうと思つてたんだ。昨夜は村のことなんか思ひだしてよ、きさまにすつかり同情しちまつたんだ……よし、それぢやひとつ、この若造をたすけてやらうかな、と思つたのさ。さうしてきさまのすることを見てゐたんだ——言ひだすかな、言ひださねえかな、と思つてよ。ところが、きさま……何だ、

そのさまは？ まるで乞食ぢやねえか！……よくまあ金のために、そんな恥しらずな眞似ができたもんだ！ 馬鹿野郎！ なんて慾の皮のつづばつた畜生なんだ！……きさまは、自分てものをすつかり忘れちまつてるんぢやねえか……三百や五百の端た金で、自分てものを賣つちまひやつて！……

——親方！ ありがたうございます！ お禮を申します！……この金が、おらにやどれだけありがてえものだから！……おらあ、ほんとに金持になつたんだ……金持に！……ガヴリーラは有頂天になつて、わくわくし、いそいでその金を内懐にしまひこみながら、金切聲をあげて叫んだ。——ああ、お前さまはほんとにいい人だな！……おらあ一生忘れねえ！……どんなことあつたつても、けつして忘れやしねえです！……婢や子供にもさういつて、お前さまのためにお祈りをさせますだ！

チエルカッシは、彼が嬉し泣きになくこゑを聞き、貪婪な望みがみたまされた喜びにかがやき、ひきつつてゐる顔をながめてゐた、するとふいに、自分は故郷をはなれ、浮浪人の仲間にはいり、泥棒渡世をしてはゐるけれども、自分といふものを忘れはてて、こんなにまで貪慾に、こんなにまで卑劣になることは、けつしてあるまいといふ氣持を感じた。さうだ、どんなことがあつたつて、こんな醜態を演じるものか！……そんなことを考へ、そんなことを感じてゐると、彼は自分

が自由だといふ氣持が身體いつばいにみちあふれてきて、なんだかこのさびしい海邊にガヴリーラをひとりのこして、立ちさつてゆく氣になれなかつた。

——お前さまのおかげで、おらあほんとに仕合せになれるです！——ガヴリーラはまた大きな聲をあげて叫んだ、そしてチエルカッシの手をつかんで、それに自分の顔をこすりつけた。

チエルカッシは、狼のやうに齒をむきだして、だまつてゐた。ガヴリーラはなほもしやべりつづけた。

——わしがどんなこと考へてたか、お前さまにわかるかね？ わしらがここまでくる途中、わしはこんなことを考へてたんです……よし、この野郎をとつつかまへて——つまりお前さまのことですぜ——權でもつて一つガアンとやつて……錢はこつちへもらつておいて、野郎は海んなかへつきおとしちまふ……つまりお前さまをな……そんなことをおらあ考へてたんですぜ。なあに、見つかりつこはありやしねえさ。よしまあ、だれかがその屍體を見つけたとこで、それがだれの屍體で、どうして殺されたのかなんて、せんさくするものはありやしねえさ。大體が、この野郎は、みんなでそんなに大さわぎをするほどの人間ぢやねえ！……この世にや用のねえ人間さ！ だれがこんな男のために仕返しなんぞしてやらうと思ふもんかい！ そんな風におらあ考へたんですぜ。

——やい、野郎！ その金をこつちへよこせ！……——チエルカッシがガヴリーラの咽喉首をひつつかんで、どなつた。

ガヴリーラはふりもがうとして二三度はげしく身體をゆすぶつた。するとチエルカッシは、もう片方の手をのばして、蛇のやうにギウツと相手の首にまきつけた……ルバーシカがびりびりとした、そしてガヴリーラは砂の上に放りだされた。彼はポカンと大きく眼を見ひらいて、両手で宙をつかんで、足をばたばたさせてゐた。チエルカッシは素ツ氣なく、仁王立ちになり、眼をひからせ、憎憎しげに齒をむきだして、骨を刺すやうな皮肉なせせら笑ひをあびせかけた。ながい口髭が、角ばつて尖つた顔の上で、神経質にはねをどつてゐた。彼は生れてからこのかた、こんなにひどい打撃をうけたことは一度もなかつた、だからまた、こんなにひどく腹をたてたこともなかつたのだ。

——なんだと？ 手前が仕合せになるんだと？ フン！……——彼は冷やかな笑ひのうちから、ガヴリーラに訊いた。さういつておいて、彼はいきなりくるりとガヴリーラに脊中をむけて、町の方にむかつて歩きだした。ところがまだ五六歩もいかないうちに、ガヴリーラが猫のやうに身をまるめて、パツとびおきた、そして手をぐるぐると大きくまはし、チエルカッシをめがけて大きな圓石をなげつけた。それといつしよに、いかにも憎憎しげにわめいた。

——この野郎！……  
 チェルカッシはあつと叫んで、両手で頭をかかへ、二三歩まへによるめいて、くるりとガヴリーラの方に顔をふりむけたが、そのままぱつたりと砂の上に俯向けに倒れてしまった。ガヴリーラは息をこらして、そのありさまをながめてゐた。チェルカッシは足をふんばつて、頭をもたげようとした、すると身體がピンとのびて、まるで弦のやうに、はげしく震へた。ガヴリーラはいつのまにか、ポーンとかすんだ曠野のうへに、もくもくした雨雲が低くたれさがつて、夕暮れのやうにうす暗くなつてゐる、はるかかなたの方へ、逃げさつていつてしまった。波はザザーと音をたてて砂濱にかけあがつてきて、砂といつしよにスーッと退いてゆくかと思ふと、またザザーとかけあがつてくるのであつた。泡がじわじわと音をたて、波のしぶきがあたりいちめん飛びちつた。

雨がおちてきた。はじめはポツリポツリであつたが、まもなく盆をくつがへしたやうなもの凄どしや降りになつた。それはまるで、水の糸で、目のこまかい網をあんでゐるやうであつた——その網はたちまちにして、海の沖合や曠野の涯をつつんでしまつた。ガヴリーラの姿は、その網のなかにきえていつた。雨と、波打ちぎはの砂の上に倒れてゐるひよる長い男とのほかには、ながいこと何も見えなかつた。しかしそのうちに、雨をついてまたかけもどつてくるガヴリーラ

の姿がみえた。彼は鳥のやうにとんできて、チェルカッシのそばにかけより、その前に身をなげだして、彼の身體を砂の上であちこちとゆすぶりはじめた。ふと氣がつくと、片方の手が、まつ赤な、なまあたたかい、ぬらぬらしたものなかにつかつてゐた……彼はぎくりとして、臍をつぶし、サッと顔色をかへて、とびのいた。

——おい、兄貴、おきなよ！——彼は雨にうたれながら、チェルカッシの耳もとに口をよせて、ささやいた。

チェルカッシは氣がついた、するとすぐにガヴリーラをつきのけて、しわがれ聲でいつた。

——あつちへいけ！……

——兄貴、勘忍しておくれよ！……おらあ、魔がさしたんだ……——ガヴリーラはチェルカッシの手に接吻しながら、おろおろ聲でいつた。

——うるせえ！……あつちへいけつたら！……——チェルカッシはしわがれ聲でくりかへした。

——おらあ、ほんとに心得ちげえをやつちまつた！……兄貴、どうかな、勘忍しておくれよ！

……

——何をこきやがる……あつちへいけ、この野郎！……トットとどこへでも失せやがれ！——  
 チェルカッシはいきなりさうどなると、身をおこして、砂の上に坐りこんだ。その顔はまつ蒼で、

憤怒の色がみなぎつてゐたが、眼だけはどろんとして、眼瞼がたれさがり、ひどく眠たいときのやうな眼つきになつてゐた。——きさまは、いつたにまだ何の用があるんだ？ するだけのことをしたら、さつさとどこへでもいきやがればいいぢやねえか！——さうして、彼は立ちあがつて、悲歎にくれてゐるガヴリーラを蹴とばしてやらうとおもつたが、足がいふことをきかなかつた。もしガヴリーラがその肩をかかへて、抱きとめなかつたならば、あぶなくもう一度ひつくりかへるところであつた。ちやうどチエルカッシとガヴリーラとは、おたがひにすぐ鼻さきに、顔と顔をつきあはせるやうな工合になつた。二人とも血の氣がうせて、恐しい形相をしてゐた。

——畜生ッ！——チエルカッシは、自分の手下になつた若者の、大きく見ひらいた眼にむかつて、ベツと唾をはきかけた。

すると若者は、おとなしく袖でそれをふきとつて、ぼそぼそとつぶやいた。

——思ふ存分のことをしておくんなさい！……おらあ、何も手むかひはしねえです。それであ、おらの罪を許しておくんなさい！

——意氣地なし野郎め！……手前てめえにや、わるいこともできねえんだな！……——チエルカッシは、いかにも相手をさげすむやうな調子で叫んだ、そしてジャケツの下にきてゐるシャツをひきさいて、だまつて、ただときどき齒をくひしぱりながら、自分で頭を繙帯しはじめた。——金は

とつたのか？——彼は苦がにがしげにいつた。

——ううん、おらあとりにやしねえ！ わしはもう、そんなもの要らねえです！……どうせろくなことはねえだから！……

チエルカッシは、ジャケツのポケットに手をつこんで、紙幣束きつぽうたばをつかみだし、そのなかから百留紙幣ひゃくりゅうしへいを一枚だけぬきだして自分のポケットにしまふと、あとはそつくりガヴリーラのまへにながしてやつた。

——もつていけ！

——おらあ貰えねえよ、兄貴……とてもそんなことできねえです！ 勘忍かんじやうしておくんなよ、兄貴！

——もつていけつたら！……——チエルカッシは恐ろしげに眼をむきだして、どなりつけた。

——おらのやつたことを許しておくんな！……さうすりや、おらあ貰つてくです……——ガヴリーラはおづおづとそれだけいつて、チエルカッシの足もとの砂の上に身をふせた。砂はさつきからの大雨にぬれて、ぐつしよりと濕つてゐた。

——ぐづぐづいはねえで、とつておくもんだ、腰拔野郎！——チエルカッシがきつぱりといつた、そして相手の髪かみの毛をつかんでぐいと頭をひきあげ、その鼻面に紙幣束きつぽうたばをおしつけた。

——さあ、とれ！ とつておけつたら！ たゞ働きをしたわけぢやあるめえし！ びくびくすることあねえ、とつておけ！ 人間ひとり殺しそなたからつて、なにもさう氣にかけることはねえやな！ おれみてえな人間は、殺されたつて誰も泣いちゃくれめえ。それどこか、さうと知つたら、かへつてみんながお禮をいふぜ。な、さあ、とつておけ！

ガヴリーラは、チエルカッシが笑つてゐるのを見ると、急に氣がかかるくなつた。彼はその紙幣束を、しつかりと手ににぎりしめた。

——兄貴！ それぢや、おらを許してくれるんだね？ え？ 嫌なのかい？ え？——彼は泣聲になつて訊ねた。

——まあ、いいさ！……——チエルカッシは立ちあがつて、よろよろとよろめきながら、相手に調子をあはせて答へた。——許すとか、許さねえとか、そんなこと何もありやしねえぢやねえか！ 今日他人の身、明日はわが身つてことがあらあ。お互ひつこさまだあね！

——あーあ、兄貴、兄貴つたら！……——ガヴリーラは頭をふりたてながら、悲しさうに深い溜息をついた。

チエルカッシは、彼のまへに突立つて、奇妙な笑ひをうかべてゐた。頭にまきつけた布は、だんだんに血にそまつて、あの赤いトルコ帽に似てきた。

雨は樽の底をぬいたやうに降りしきつてゐる。海はごうごうと吼え、波は氣が狂つたやうに猛りたつて岸にぶつかつてきた。

二人はしばらくだまつてゐた。

——それぢや、あばよだ！——チエルカッシは皮肉な調子でさういつて、歩きだした。

彼は膝ががくがくして、足もとがひどくたよりなげであつた、そして妙な工合に頭をかかへてゐた——まるでそれがどこかへ落つこちてしまひやしないかと恐れてでもゐるやうに。

——おらのしたことを許しておくんなよ、ねえ、兄貴！……——ガヴリーラがもう一度たのんだ。

——何でもねえぢやねえか！——チエルカッシは足をはこびながら、冷やかにいつた。

彼はよろめきながら歩いていつた。あひかはらず左の手で頭をしつかりとおさへ、右手で例のながい褐色の口髭を悠然とひねりながら……

ガヴリーラは、彼が雨のなかに姿をけしてしまふまで見おくつてゐた。雨は、雲から地上まで断れめのない細い流れのやうになつて、ますますはげしく降りつづのり、五六歩さきも見とほせないやうな鋼鐵色の濃い霧で、曠野をいちめんにつつんでゐた。

やがてガヴリーラは、びつしよりにぬれた圓帽をぬいで、十字を切り、掌のうちにかたくにぎ

つてゐた紙幣束をながめて、胸いつばいに深く息をすひこみ、いそいでそれを内懐にしまひこむと、チエルカッシが姿をけしたのとは反対の方角にむかつて、砂濱を大股ですたすたと立ちさつていった。

海は吼えたけり、砂濱にむかつて山のやうな大波をドドーン、ドドーンとうちあげた。波はくだけで、飛沫となり、泡となつてとんだ。雨は水面に、地上に、がむしやらに降りそそぎ……風はビュービューとうなり……あたりには耳を聳するばかりの唼り聲と、吠え聲と、轟音ばかり……雨にさへぎられて、もう海も空もみえなかつた。

雨と波のしぶきとは、まもなく、チエルカッシが倒れてゐた場所の赤い汚點をあらひながし、砂濱にのこされたチエルカッシと若い百姓との足跡もけしてしまつた……そして、この荒涼たる砂濱には、あの二人の男のあひだに演じられた小さなドラマを思ひださせるものは、もう何も残つてはゐなかつた。

(一八九四年作)

## 二十六人の男と一人の少女

私たちはみんなで二十六人ゐた——いや、じめじめした地下室に二十六個の生きた機械がとちこめられてゐたといつた方がいい。そこで私たちは朝から晩まで粉をねつては、巻パンや堅パンをこしらへてゐたのだ。この地下室の窓といへば、私たちのまへに口をひらいてゐる、濕氣のためには青青と苔のむした煉瓦でたまたまれた穴倉にむかつて、ただ一つ開いてゐるだけであつた。その窓には外から目のこまかい金網がはつてあり、しかも硝子には粉埃がいつばいたかつてゐるの  
で、陽の光もそれをとほして中まで射しこんでくることがなかつた。私たちの主人が金網で窓を嚴重にふさいでしまつたのは、私たちが彼のパンを勝手に乞食や、あるひは私たちの仲間で仕事にあぶれて腹をべこべこにしてゐる連中に、ふるまつてやることができないうにするためであつた。主人は私たちが目傭取りと呼んでをり、食事には肉のかはりに腐つた臍物をくはせた……  
私たちは、煤と蜘蛛の巣におほはれた低い天井が頭をおさへつけるやうに垂れさがつてきてゐる、この石の箱みだいな地下室でくらししてゐるのが實に息苦しく、窮屈であつた。汚點と黴でさまざまの模様を描きだしてある厚い壁にとりかこまれたこの中にゐると、私たちは胸がむかつき、重苦しい氣分になるのであつた……私たちが朝五時におきた、だから充分眠るひまもありやしな  
い、そして氣のぬけたやうなぼんやりした顔つきで、六時といふともう仕事臺にむかひ、私たち



がまだ寝てゐるあひだに他の仲間がちゃんと支度をしておいでくれた捏粉をまるめて、巻パンをこしらへにかかるのであつた。さうして朝から晩の十時までずつと、私たちのうちの一部分のものは仕事臺にむかつて坐り、身體が硬化してしまはないやうにとでもいふやうに絶えず身體をゆすぶりながら、ねばねばした捏粉を両手でまるめたり、のぼしたりしてゐた。他の一部分のものは、そのあひだぢゆう、粉に水をさしては、こねかへしてゐる。釜のなかでは一日ぢゆう、なにかも思はしげな、うら悲しい聲をたてて、お湯がふつふつと煮えたぎつてゐた。この釜で巻パンを蒸すのだ。焼き手は、大きなしやもじ様のもので、竈の下をやけにひつかきまはして、煉瓦がよく焼けてきたところを見はからひ、表面がつるつるするやうに程よく蒸けたパンをつぎつぎにと手早くその上にうつすのである。竈の一方の口では、朝から晩まで薪をもやしてゐる、その赤い炎の反照が仕事場の壁のうへにをどつてゐた——それはあたかも、聲をたてずに私たちを嘲笑つてゐるかのやうであつた。この大きな竈は、昔話にでてくる化物のいやらしい大頭に似てゐた——ちやうどその化物が、床の下から頭だけ突きだし、大きな口をあけてゐるやうだ。その口のかなには火が炎炎と燃えさかつてをり、そいつは私たちのうへに熱氣を吹きかける。またその前額部にあたる邊には、通風孔が二つの黒い口をひらいて、私たちのほてしない労働をながめてゐる。この二つの深い孔は眼のやうだ——さうだ、冷酷無情な化物の双の眼だ。この二つの眼は、

いつもおなじやうに暗いまなざしで私たちをながめてゐた——それはあたかも、お前たちの奴隷のやうな姿はもう見あきた、お前たちからはもはや何も人間らしいものを期待することができない、だからおれは賢者の冷たいまなざしでお前たちをさげすんでやるのだ、とでも言つてゐるやうであつた。

くる日もくる日も私たちは、粉埃と、私たちが中庭から足にくつつけてきた砂埃とにまみれ、猛烈な悪臭を放つてゐるむんむんした空氣のたちこめてゐるなかで、捏粉をまるめて、のぼして、巻パンをこしらへた。汗がその上にボタリボタリとおちた。私たちは自分の仕事をはげしく憎んでゐた、だから私たちは自分の手で作くりだしたものを一度も口にすることはなかつた。私たちはこんな巻パンを食べるよりは、むしろ黒パンの方を喜んだ。私たちは長い卓をはさんで九人づつ向ひあつて坐り、ながい時間ぶつづげに、まったく機械的に手のさきをうごかしてゐた。私たちはもう自分の仕事にすつかり慣れてしまつてゐたので、ほとんど一度も自分のやつてゐることを考へてみたこともないくらいであつた。また仲間同士はおたがひに、しよつちゆう顔をつきあはせてゐたので、みんな仲間の顔の皺の一本一本まですつかり知りつくしてゐた。私たちはなにも話すことがなかつた。それにもいつか慣れてしまひ、罵り合ひでもするよりほかは、いつも私たちは黙りこくつてゐた——人間といふやつは、いつだつて何かしら口喧嘩の種になるやうな



ず壁のうへでふるへてをり、聲のない嘲笑をあげせかけてゐる……だが私たちは、自分たちにも縁のないやうな言葉で、おのれの漠然とした悲しみを、太陽を失つて生きてゐる人間のおもくるしい懨鬱を、奴隷の哀愁を、うたつてゐるのだ。こんな風にして、私たち二十六人の男は、ある大きな石造りの家の地下室にくらしてゐたのだ。この三階建の石造りの家が、そつくりそのまま私たちの肩に直接にのつかつてゐるのではないかと思はれるほどに、重苦しい生活であつた……

だが、私たちのところには、歌のほかにもう一ついいものがあつた——それは私たちみんなの敬愛の的で、おそらく私たちにとつては太陽のかけりをなすものであつた。この家の二階に、金糸の縫箔をやる店があつて、そこではたくさんの娘さんたちが働らいてゐたが、そのなかにまじつて今年十六になるターニャといふ小間使があつた。彼女は毎朝、支關から私たちの仕事場に通じる扉にはめこんである窓ガラスに、いかにも快活さうな碧い眼をもつた小つちやなバラ色の顔をおしつけて、やさしみのこもつた、よくひびく聲で叫ぶのであつた。

——囚人さん！ パンおくれ！

私たちはこの聞きなれた美しいこゑを耳にすると、いつせいにふりむき、私たちにニコニコ微笑みかけてゐるこの清淨無垢な少女の顔を、いかにも喜ばしげな、人の好きさうな眼ざしでながめるのであつた。窓ガラスにべつたりとおしつけられた鼻や、ボカンと口をあけて笑つてゐる、そのバラ色の唇のかけからちかちかと輝いてゐる細かいまつ白な歯をながめるのが、私たちには無上の樂しみであつた。私たちは先をあらそつてとんでいつて、彼女に扉をあけてやる、するとこのかはいらしい、快活な少女は前掛をかるくつまんで仕事場のなかに入つてきて、ちよつと首をかしげて私たちの前に立つ、そしてみんなに微笑みかける。ながい、ゆたかな栗色の髪の毛が肩をこして、胸の方までたれさがつてきてゐる。みんな汚らしくて、陰鬱で、不具者かたはもみたいな男ばかりの私たちは、下から彼女を見あげてゐる——扉口の闕は仕事場の床よりも四段ぐらゐ高かつたのだ。——さうして仰向いて彼女をながめて、私たちは彼女に朝の挨拶をし、よそゆきの言葉でなにか話しかける。こんな言葉は、私たちのあひだでは、彼女に對してしか使はなかつた。私たちは彼女と話をするときには、聲までやさしくなり、冗談もほんの軽いものになる。私たちは彼女に對しては何もかも特別にした。焼き手は籠から、一番こんがりよくやけた巻パンをとりだして、器用な手つきでターニャの前掛に置いてやる。

——氣をつけていきなよ、家のおやぢにつかまらねえやうにな！——いつも私たちは彼女にさ

う注意してやる。すると彼女は發るさうに笑つて、快活にさげふ。

——さよなら、囚人さん！——そして仔鼠のやうにすばしこく姿をけしてしまふ。

ただそれだけのことだ……けれど、私たちは彼女が去つた後いつまでも、彼女のことを樂しげに語りあつてゐる。もつとも私たちの話といへば、いつもおなじもので、昨日も一昨日も話しあつたことを、そつくりそのままくりかへしてまた語りあつてゐるのだ、それはなぜかといふと、彼女も、私たちも、それから私たちのまはりのものも、何から何までが昨日一昨日とちつとも變つてはゐないからだ……人間が生きてびんびんしてゐるのに、その人をとりまく周囲のものが何一つ少しの變化もみせないといふことは、實に苦しい、痛ましいことである。それがもしその人の魂をひとおもひに壓し殺してしまはなかつたなら、彼はそれからさき一日生きのびることに、金縛りにあつたやうにびくとも動かない周囲のありさまが、いよいよたまらなくなつてくるであらう……私たちはいつも女の話となると、ときどき自分でも耳をおほひたくなるやうな恥しらずな、淫らな言葉を吐きちらすのであつた。それも無理はない、といふのは、私たちの知つてゐる女たちといへば、みんなそんな調子で話すのがふさはしいやうな連中ばかりであつたから。しかしターニャのことになると、私たちはけつしてそんなひどい言葉はつかはなかつた。私たちはみんな、けつして彼女に指一本ふれようとはしなかつた、いやそれどころか、彼女は私たちの口か

ら一度だつてふしだらな冗談一つきいたことはなかつたはずだ。それといふのは、おそらく、彼女が私たちのところにながくとどまつてゐたことがなかつたからであらう、まづたく彼女は空から流星でもおちてきたやうにちらりと私たちのまへに姿をみせたかと思ふとすぐにまた消えてしまふのである。それからまたおそらくは、彼女がまだほんの子供で、しかも大へんに美しかつたからでもあらう、實際ほんたうに美しいものはすべて、私たちのやうな荒くれた男たちの心にさへも尊敬の念をおこさせるものであるからだ。それに、ここの懲役のやうな仕事私たちがまるで間のぬけた牛みたいにしてしまつたけれど、それでも私たちはまだやはり人間であつた、だからすべての人間とおなじやうに私たちもまた、何でもいから尊敬の的となるやうなものをもたずには生きてゆくことができなかったのだ。さういふ意味で、彼女は私たちにとつては、何人にもまして貴重な存在であつた。それにまた、彼女のほかに、この地下室に住んでゐる私たちに注意をむけてくれる者はなかつたのだ。この三階建の家には何十人も人間が住んでゐたのだが、だれひとりとして私たちに注意をむけてはくれなかつた。それから最後に、おそらくこれが一番大切な點だらうと思はれるが、私たちはみんなが彼女を、なにかしら自分たちのものと考へ、私たちのやる卷パンのおかげで生存をつづけてゐる人間であるといふ風に見てゐた、そこで私たちは焼きたての卷パンを彼女にあたへることを自分たちの義務と考へるやうになり、それはまた私

たちにとつては聖像に捧げる日日の供物ともなつた。これは私たちには、ほとんど神聖な儀式のやうに思はれ、それによつて私たちと彼女とは日ごとにますます固くむすばれてゆくのであつた。巻パンのほかに、私たちは彼女にいろんな忠告もあたへた——もつと蕭物をたくさん着て暖かくしてゐるとか、階段をあんまりいそいで駆けおりてはいけないとか、あんまり重い薪の束をはこんだりしないやうにとか。彼女はニコニコしながら私たちの忠告をきいてゐた、そして聞きをはると高い笑ひでそれに答へるのであつた、そのくせ一度も私たちのいふことをきいたためしはなかつた、けれど私たちはそれに少しも腹をたてなかつた、といふのは、私たちは私たちが彼女のことをそれほど心配してゐるのだといふことがわかつてもらへさへすれば、それでよかつたからなのだ。

よく彼女は私たちのところへ、いろんな願ひごとをもつてきた。たとへば、酒倉の重い扉をあけてくれとか、薪をわつてくれとか、たのみにくるのだ。すると私たちは喜んで、一種の誇りさへもつて、彼女のたのみを何くれとなくきいてやるのだつた。

だが、あるとき私たちの仲間のひとりが彼女に、彼の一張羅のルバーシカをつくらせてくれとたのんだら、彼女はいかにもその男をさげすむやうな調子で鼻をならして、いつた。

——そんなことまで、わたしにしるつていふの？ そりや無理だわ！……

私たちはみんなでドツと聲をあげて、そのをかした野郎を嗤つてやつた。それ以來もつたれも彼女にものをたのむやうなことはしなくなつた。私たちは彼女を愛してゐたのだ——すべてはこの一言でつきる。人間はいつも何人かに自分の愛情を注ぎたいといふ欲望をもつてゐる——たとひその愛情がはねかへされたり、汚されたりしたつて、そんなことは一向かまはないのだ。とにかく私たちはターニャを愛さずにはゐられなかつた、なぜといふに私たちに彼女のほかに愛情を注ぐべき相手があるなかつたからだ。

ときをり私たちのうちのだれかが、なぜともなしにふいに、こんな風なことを考へだしたりする。

——いつたいおれたちは何だつてあの娘ツ子のことを、こんなにちやほやするんだね？ 第一、あの娘ツ子にそんな値打があるといふのか？ え？ おれたちはあの娘ツ子をあんまりたてまつりすぎるぜ！

だが、その男がそれをもし口にださうとでもしようものなら、私たちはいそいで、むりやりにそれをおしとどめるのであつた。とにかく私たちに、なにかを愛してゐることが必要だつた。私たちは自分でそれを見つけたして、愛してゐたのだ。私たち二十六人の愛の對象——それは、めいめいにとつても神聖にして犯すべからざるものでなければならなかつた。もしそれに反

對する者があれば、それは私たちの敵だ。私たちが愛してゐたものは、實際にはそれほどいいものではない、けれど私たちは二十六人が心を合せて愛してゐたのだ、だから私たちは、私たちにとつてこれほど貴重なものだから、他の人たちの眼にも神聖なものとして映つてくれるやうにと望んだのである。

私たちの愛は、憎しみにもおとらないほどに重苦しいものである……そしておそらくそのためであらう、ある一部の傲慢な連中は、私たちの憎しみの方が愛よりももつと魅力があるなぞとうそぶいてゐる……だが、もし果してさうならば、なぜ彼らは私たちが逃げ去つてゆかないのであらうか？

私たちの主人は、この私たちの仕事場のほかに、もう一つ白パンの製造場をもつてゐた。それはやはりこの同じ建物のうちにあつて、私たちの穴倉とは壁一重へだててゐるだけであつた。しかし、そつちの方のパン焼職人たちは——四人ゐたけれど——自分らの仕事の方が私たちの仕事よりも高尚である、したがつて人間としても自分らの方が私たちよりもすぐれてゐるのだ、といふ風にかんがへて、いつも私たちをさけてゐた。彼らはけつして私たちの仕事場にやつてこなかつた。

中庭で出あつたりしても、いかにも人を馬鹿にしたやうな嘲笑を私たちにあびせかけた。私たちの方でもむかふへ出かけてゆくやうなことはなかつた。もつとも、それは主人から固く禁じられてもゐたのだが——といふのは、私たちが上等のバターパンをぬすんだりしやしないかといふ危惧を、主人が抱いたからのことである。私たちはその白パン焼の職人どもがきらひでやつた。といふのは、實は私たちが彼らを嫉妬してゐたのだ。彼らの仕事の方が私たちのよりもずっとらくであつて、しかも彼らの方が私たちよりは給料もよければ、食べ物もいいのだ、その上に彼らの仕事場の方がずつとひろびろとしてゐて、明るいのだ。彼らはみな、私たちとはちがつて、健康さうで、こざつぱりした身なりをしてゐた。私たちはといへば、みんな黄いろい顔や灰色の顔をしてゐて、微毒にかかつてゐるのが三人あり、疥癬をわづらつてゐるのも數人ゐる、ことに一人の奴なぞはリューマチで手足がまるできかないのだ。むかふの職人どもは、祭日とか仕事の日まなときなどには、きちんとした背廣をきこみ、ギウギウなる長靴をはいて出かけてゆく。彼らのうちの二人は手風琴をもつてゐる、さうしてみんなで町の公園へ散歩にゆくのだ。ところが私たちがときときは、よこれた襤褸をまとひ、手製の上靴草鞋をはいて歩くといつたありさまなので、町の公園へでかけていつても巡査がいてくれないのだ。——そんな工合だから、どうして私たちに彼ら白パン焼の職人どもを愛することができたであらう！

ところがある日私たちは、彼らの仲間の一人の焼き手が、ひどく飲みすぎて失敗をやらかしたので、主人がさつそく彼を解雇して、もう別の男を雇ひ入れたといふことを知った。その別の男といふのは、兵隊あがりで、縞子のチョッキの胸にいつも金の時計の鎖をぶらさげて歩いてゐるといつた風な奴だ。私たちはこのハイカラ者に好奇の眼をそそいだ。彼の姿をながめようと思つて、私たちはかはるがはる、なんとか口實をもつけては中庭にとびだしていつたものだ。

だが、彼の方からすすんで私たちの仕事場に姿をあらはした。靴のさきでボンと蹴とばして扉をあけ、それをあけつ放しにしたまま閻の上に立ちはだかつて、ニコニコ笑ひながら私たちに言葉かけた。

——やあ諸君、御機嫌よう！ よく精がでますね！

あけはなされた扉口から、もやもやした濃い煙でもふきこんでくるやうな工合に、冷い風が彼の足もとをすりぬけて吹きこんできた。それでも彼はあひかはらず閻のうへに突立つたまま、私たちを見おろしてゐた。きれいになでつけた口髭のしたから、大きな黄ばんだ歯がざらざら光つてゐるのが見えた。彼のチョッキは、まつたく一風かほつたものであつた——青い地に花が縫ひとりしてあつて、それがちかちか光つてゐるのだ、ボタンには何か赤い石がつかつてある。そこへもつてきて、例の金の鎖だ……

この兵隊あがりの男はかなり好男子であつた。脊がすらりとしてゐて、いかにも健康さうに赤赤とした頬をもつてをり、大きな明るい色の眼はぱつちりとしてゐて、どこかに優しさをたたへてゐた。頭にはいつもピンと糊のきいた白いコック帽をのせてをり、汚れ目ひとつないきれいな前掛の下からは、先のとがった流行型の、きれいにみがきあげた長靴がのぞいてゐた。

私たちの方の焼き手が、彼にむかつて丁寧に、扉をしめてくれるやうにとたのんだ。彼は悠悠とおちつきはらつて、いはれたとほりに扉をしめ、さて私たちにむかつて主人のことを訊ねはじめたものである。私たちはおたがひに先をあらそつて彼に、私たちの主人は老獺で、うそつきで腹ぐるくて、残酷でといふやうなことを、つまり主人について言ひ得ること、また言はずにはゐられないことを、あらひざらひ述べた。しかしそれをいちいちここに書くわけにはいかない。兵隊あがりは耳をかたむけながら、ときどき口髭をびくびくふるはせ、やさしみのこもつた明るい眼ざしで私たちを眺めまはしてゐた。

——ここには娘ツ子がずぶんとくさんゐるね……—彼がとつぜんいつた。

私たちのあるものは諷らふやうに笑つた。またあるものは人のよささうな顔をしかめた。この家には娘ツ子がみんな九人ゐると、だれかが兵隊あがりに説明してやつた。

——お前たち、よろしくやつてるんだらう？—兵隊あがりは眼をばちやりながら訊いた。

私たちはまたドツと笑つた、けれどこんどはもう前ほどに思ひきつて笑へなかつた、なにかしら當惑したやうな笑ひであつた……私たちの仲間の多くのものは、自分たちだつて何も彼にひけをとらない一人前の立派な若者なのだといふことを、その兵隊あがりに見せつけてやりたくてたまらなかつたのだが、しかしだれ一人としてそれを敢てするものがなかつた。實をいふとだれにもそんなことができやしなかつたのだ。だれかがそれを自覺して、しづかにつぶやいた。

——どうしておらたちにそんなことが？……

——なるほど、こいつはお前たちにはちよいとむづかしい相談かな？——彼は私たちの顔をじろじろと無遠慮に見まはしながら、自信ありげにいつた。——お前たちにや、ろくな遊びもできねえつてわけか……お前たちにやそんな餘裕ゆとりもねえだらうしな……身なりだつてそれぢやどうもな……つまり着るものだつて、もう少しきちんとしてゐなきや……大體、女つてものは、身なりのきちんとした男を好くもんだ！ まづ第一に恰幅がよくて、それからどこからどこまできちんとしてゐる男、さういふのを女どもは探してゐるのさ。それと、もう一つ女のありがたがるものは、力だ……なんでも腕力でさつさと片をつけちまはなくつちや！

彼はルバーシカの袖を眩までまくりあげた右腕をポケットからだして、私たちのまへにつきだした……きらきら光る金色の生毛がいちめんにはえてゐる、この白い腕は、いかにも強さうにみ

えた。

——足も、胸も、どこからどこまで、がつしりしてゐなきやいけねえ……それから、もう一度くりかへしていふが、身なりはきちんとして、人なみのものは身につけてゐるやうにしなきやいけねえ……これがまあ人物を立派にみせる第一條件だからな……おれなんかまあそんな風だから、女にもてるんだな。おれの方から誘ひをかけたなり、手をだしたりしなくつたつて、いつでもむかふから五人や六人はおれの後を追つかけまはしてゐるんだからな……

彼は粉のはいつた袋のうへに腰かけて、どんなに彼が女にもてるか、そしてまた彼の方ではその女たちをどんなにぞんざいに扱ふかといふやうな話を、ながいこと、話してきかせた。やがて彼はかへつていつた。彼の背後で扉がギイと音をたてて閉つてからあと、私たちはながいことおし黙つて、彼のことや、彼の話していつたことを、あれこれと思ひめぐらしてゐた。そのうちに、どうかしたはづみで、みんながいつせいにがやがやと喋舌しゃべりりだした。みんなが彼に好感をもつてゐるといふことがすぐにわかつた。いきなりやつてきて、ここに坐りこんで、話をしてゆくなんて、實に氣さくで面白いやつだ。なにしろ、これまで私たちのところにやつてきたものは一人もなかつた、ましてこんなに親しげに私たちと話をかはした人間なんて、なほさらなかつたのだ……私たちはみんな彼のことを語りあひ、きつと近いうちに彼はあの金糸の縫消ぬいほぎをやつてゐる娘



たちのあひだですばらしい人氣を博するであらうなぞと言ひあつた。その娘たちのことをいへば、私たちはよく中庭で顔をあはせるのだが、そんなときにはいつもきまつて彼女らは、いかにも人を蔑すんだやうな容子で口をひんまげて、わきによけてしまふか、あるひは私たちなぞまるで眼中にないといった調子で、づかづかと私たちのあひだを突切つてゆくのであつた。私たちは中庭や私たちの仕事場の窓のわきをとほつてゆく彼女らの姿に、いつもただ見とれてゐるだけであつた——彼女らは、冬はなにか特別ごしらへのあたたかさうな帽子と外套をきこみ、夏は花のかざりのついた帽子をかぶつて、いろんな色あひのパラソルをさしてくるのであつた。そのかはり私たちの方でも、その娘たちのことといへば、もし御當人たちが聞いたら恥しさと腹だたしさのあまり卒倒してしまふだらうと思はれるやうなひどいことをいひあつてゐたものだ。

——だけど、あいつはターニユシカには、どうだらう？……手をださねえかな？——ふいに焼き手が、氣づかはしげにいつた。

この一言にハツとして、私たちはみんな黙りこんでしまつた。どうしたわけか、私たちはターニヤのことをとんと忘れてゐたのだ。あの兵隊あがりのやつめ、ひよつとしたらあの逞しい、美しい姿でターニヤをひきつけ、彼女を私たちからひきはなしてしまふかもしれない。やがて一座には騒がしい言ひ争ひがはじまつた。あるものは、ターニヤはけつしてあんな奴をよせつけない

といつた、するとまたあるものは、いやターニヤにはとてもあの兵隊あがりとは太刀打ちができないと言ひ張つた、さうするとこんどはまた別の連中が、もしあの兵隊あがりがターニヤにうるさくつきまとふやうなことがあつたら、やつの肋骨をたたき折つてくれようといひだした。そして最後に、それではみんなであるの兵隊あがりターニヤとのあひだをよく氣をつけてやることにし、彼女にはあいつを用心するやうにと警告してやることにきめた……それで言ひ争ひもおしまひになつた。

ひと月ほどたつた。兵隊あがりは、白パンを焼いたり、金糸の縫酒をやつてゐる娘たちをつれて散歩をしたりしてゐた。その合ひ間に、よく私たちの仕事場にもやつてきたが、もう娘たちを手に入れた自慢話はあまりしなくなつた。いつもただ口髭をひねつては、甘さうに唇をなめまはしてゐるばかりであつた。

ターニヤは毎朝私たちのところへ巻パンをもらひにやつてきた。あひかはらず、かはいらしい快活な少女で、私たちにはやさしくふるまつてくれた。私たちは彼女に兵隊あがりの話をしかけてみた、すると彼女は奴を「どんぐり眼まなこの牛モウモウ」とか、その他いろんな滑稽な綽名でよんだものである。それで私たちはすっかり安心してしまつた。私たちは、二階の娘どもが兵隊あがりの尻をおつけまはしてゐるのを見ると、われらの少女ターニヤを大いに誇りたい氣持にさへ

なつた彼にたいするターニャの態度は、私たちみんなの氣持を高くひきあげてくれた。私たちはそのやうな彼女の態度にひつばられて、自分たちまでも同じやうに、兵隊あがりに対して蔑すむやうな態度をとるやうになつてきたのである。そして私たちみんなは、ますます彼女が好きになり、前にもまして親切に、よろこんで毎朝彼女をむかへるのであつた。

だがある日、兵隊あがり少し酔つぱらつて私たちのところへやつてきた。ぺつたり坐りこむと、ニタニタ笑ひだした。なにを笑つてゐるのかと私たちが訊くと、彼はこんな話をしてきかせた。

——二人の女つ子がな、おれのこと喧嘩をおつぱじめやがつてな……リヂカとグルシカのやつさ……まるで、ざまあなかつたぜ、アハハハ……一方が相手の髪の毛をひつつかんでさ、玄關の床にひきずりたほして、その上に馬乗りんなつてよ……アハハハハ……顔つ面をひつかきむしる……着物をひきさばく……とんだお笑ひ草さ！ いつたい、あの女どもは何だつてボンボンと景氣よく、なぐり合ひをやらねえのかね？ 女つてやつは、なぜあんな風にやたらにひつ掻いたりばかりしてゐるんだらうな？ え、おい？

彼はいかにも健康さうな、こざつぱりした、そしてなにか浮きうきしたやうな容子でベンチに腰をおろし、ひつきりなしに哄笑ひをしてゐた。私たちはみんなだまつてゐた。このときには、

なぜか私たちにはこの男がいやらしく思はれた。

——まつたく、おれがどんなに女どもにもてるかさ？ まあ、考へてみろよ！ おもしろえくらゐだぜ。眼をばちばちツとやるひまに、もつちやんと一人や二人はできてゐるんだからな。ばかばかしい話だ！

彼は金色の生毛におほはれた白い腕を頭上にふりあげ、いきなりそれをふりおろして、膝を力まかせにボンとたたいた。彼はびつくりするほど愛想のいい眼ざしで私たちをながめてゐた——どうやら彼は自分でも、なぜこんなに女運がいいのだらうと不思議に思つてゐるらしい容子だつた。彼の大きな楮ら顔は、いかにも満足さうに、また幸福さうに、てらてらと光つてゐた、そして例によつて甘さうに唇をなめまはしてゐた。

私たちの焼き手はぶりぶりして、力まかせに金のしやもじで竈の下をひつかきまはしてゐたが、ふいに相手を馬鹿にしたやうな調子でいつた。

——雑魚をつかまへるのはわけあねえが、鯉をつかまへるのは難かしからうぜ……

——なんだい？ そいつはおれに言つたのか？——兵隊あがりか訊きだした。

——さうさ、お前にいつたのよ……

——そりやどういふわけなんだい、いつたい？

——なんにもねえ……ただそれだけの話さ！……

——いや、待てよ。こいつにや何かわけがある。その鯉つてのは、いつたい何のこつたね？

私たちの焼き手は、それには答へずに、例の金のしやもじを巧みにつかつて、釜でふかした巻パンを籠のなかに投げこみ、こんがり焼けたやつをそのなかからとりだして、床のうへに放りだした。小僧どもがそれを拾ひあつめて、糸にとほして吊さげるやうにするのである。彼は兵隊あがりのことも、それからその話のことも、まるで忘れてしまつたやうな顔つきであつた。ところが兵隊あがりは、どうしたのか、急にそわそわしたものだ。いきなりヌツと立ちあがると、籠のそばに歩みより、空中できらりきらりとふるやうに光る金のしやもじの柄をにぎつてる焼き手の手もとに、ずいとよりそつた。

——さあ、いつてみる！ そりやいつたい誰のこつた！ 人を馬鹿にしやがつて……おれはな、いざとなりや、だれだつて容赦はしねえんだぜ！ お前は、よくもそんな大それた口がきけたもんだ……

彼はほんたうに心底から怒つてゐるやうにみえた。たしかに彼には、女をたらしこむ手際よりほかには、自慢になるものは何もなかつたのであらう。おそらくそのはたらきを除いたら、彼は生命がなくなつたも同然であらう、つまり彼はただそれによつてのみ自分を生きた人間と感じることができるのであつた。

自分の精神や肉體のなんらかの病氣が、自分の生活にとつていちばん價値のある貴いものとなつてゐる、といつたやうな類ひの人間がある。さういふ人たちは、いつもその病氣のことにばかりかまけてゐて、ただそれによつてのみ生き甲斐を感じてゐるのだ。そのために苦しみ悩み、それによつて自分を育て、他人にむかつてはその話ばかりし、それによつて周囲の人人の注意を自分にひきつけようとする。その病氣を看板にして人人の同情をあつめる。その病氣よりほかには、彼の取柄といつては何もないわけだ。その人たちからその病氣をとりさつてしまひ、その病氣をなほしてしまつたら、その人たちはかへつて不幸になるであらう、なぜといへば彼らは唯一の生活の手段を失つてしまふのであるから——さうなれば、彼らはまるでぬけがらも同然だ。人間の生活といふものは、ときには、仕方なしにせめて自分のわるいところでも大切に生きてゆかなければならないほどに、惨めなものになることがある。これは別の言葉でいへば、人間といふものはときどき退屈のあまり罪を犯すものである、ともいへる。

兵隊あがりはかんかんになつて、焼き手につめより、わめきたてた。

——さあ、いつてみる？ だれのこつた？

——いはうか？——焼き手がいきなりくるりと彼の方にむきなほつた。

——いつてみる！  
 ——お前、ターニャを知ってるだらう？  
 ——うん。それがどうしたんだ？  
 ——あれのことをいつてるんさ！ できたら、やつてみるがいいや……  
 ——おれが、か？  
 ——さうとも！  
 ——あの娘ツ子を？ このおれが、か？ チェツだ！  
 ——おらたちが見物してゐてやるわ！  
 ——よオし、見てろ！ ふふッ！  
 ——あの娘は、お前なんか……  
 ——期限は一と月だ、いいか？  
 ——馬鹿いへ、そいつは虫がよすぎらあ！  
 ——それぢや、二週間だ！ よし、やつてみせるぞ！ だれのことかと思へや、あのターニカ  
 か？ チェツだ！……  
 ——さうと話がきまつたら、さつさと歸つてくれ……仕事の邪魔だ！

——二週間だな、よオし！ それぢや、お前も……

——もう歸れつたら！

私たちの焼き手は急にカーッととなつて、満面に朱をそそいで、金のしやもじをふりあげた。兵隊あがりは、びつくりしてとびのき、ちらりと私たちの方をながめてしばらく黙つてゐたが、やがて低い、けれど毒毒しい調子で吐きだすやうにいつた——「よし、いいとも！」そして立ち去つていつた。

二人が言ひ争つてゐるあひだぢゆう、私たちはみんな仕事の手をやめて、だまつて耳をかたむけてゐた。けれど兵隊あがりが去つてしまふと、急にみんなは元氣よく聲高かにしやべりだして、一座にはかにさうさうしくなつた。

だれかが焼き手にむかつて叫んだ。

——とんでもねえことをやつちまつたな、パーヴェル！

——まあいいさ、それより仕事をしろよ！——彼はぶりぶりして答へた。

私たちは、もしあの兵隊あがり本氣になつてかかつたら、ターニャの身に非常な危険がせまつてくるであらうといふことを感じた。しかし、さういふことを感じると同時に、一方また私たちみんなは、この結末がはたしてどうなるであらうか？ ターニャは兵隊あがりに対して、あく

まで頭張りとはすであらうか、どうだらう？——といふことに、はげしい、しかもなにかしら楽しい好奇心をいだいたのであつた。なにしろ私たちは、ほとんど全部が、自信をもつてかういつてゐたものだ。

——ターニャなら、がんばるとも！ あの娘が、さうやすやすと手に入つてたまるもんか！

私たちは、私たちの女神の強さをためしてみたくてたまらなかつた。私たちはおたがひに一所懸命になつて、われらの女神はとも強いのだ、だからこんどの闘ひにだつてきつと勝利を得るだらう、といひあつた。たうとう私たちはしまひには、兵隊あがりやを怒らせかたがまだ足りなかつたのではないだらうか、そのために彼があつた言ひ争ひを忘れてしまふやうなことはないだらうか、なぞと思ひ、いつそ私たちは彼の自尊心をもつとひどくきづつけてやる必要があるといふ風にまで考へだしたのであつた。その日以来私たちに、なにか特別な、一種緊張した生活がはじまつた。そんな生活は、これまでつひぞ私たちの知らなかつたものである。毎日私たちは朝から晩まで議論をした、みんなだんだんに頭がはたらくやうになつてきて、なかなかうまいことを盛んにいふやうになつた。私たちは、ターニャを賭けて、悪魔を相手にばくちでも打つてゐるやうな気がした。やがてそのうちに、白パン焼の職人どもから、兵隊あがりがいよいよ「われらのターニャに言ひよりはじめた」といふことを知らされると、私たちはみんな急にそわそわしだし、

はげしい好奇心にとらはれてしまつた——主人が私たちのこの興奮状態をたくみに利用して、私たちの一日分の仕事に捏粉を七ブードも増したのさへ気がつかないくらゐであつた。私たちはまるで仕事の疲れも忘れてしまつた。一日ぢゆうターニャの名前が私たちの口からはなれなかつた。毎朝私たちは、一種特別の期待をもつて、彼女を待ちうけてゐた。ひよつとしたら今日あらはれる彼女は、昨日までのターニャとはすつかり變つた、まるで別なターニャになつてゐるのではないかしら、といふやうなことを時をり想像してみたりした。

しかし私たちは、兵隊あがりとの言ひ争ひのことは、彼女にはなにも話さなかつた。また彼女の身の上についても、こつちからは何ひとつ訊かうとはせず、あひかはらずやさしく親切にあしらつてゐた。けれども、このときにはもうターニャと私たちとのあひだには、これまで全然知らなかつた何かある新しいものが入りこんできてゐた。その新しいものといふのは何かといへば——それは鋭い好奇心であつた。さうだ、ナイフの刃のやうに鋭い、そして冷たい好奇心だ……

——おい、みんな！ 今日がいよいよ最後の日だぜ！——ある朝、焼き手が仕事にかからうとして、言つた。

私たちは彼にいはれなくても、それはちゃんと知つてゐた、けれどそれでもやはり胸がどきどきしてきた。

——おい、あの娘をよく氣をつけて見てくれよ……もうぢきやつてくるからな！——焼き手がさういつた。するとそれに應じてだれかが疑はしさうに叫んだ。

——そんなこといつたつて、眼でみただけで何がわかるもんかい！ もつとたしかな證據が……

するとまた私たちのあひだには、生きいきとした、さうさうしい議論がもえあがつた。いよいよ今日こそ私たちは、私たちの最高の望みを盛つたあの器が、どれだけ清淨無垢であり、汚辱にたいしてどれだけつよい反撥力をもつてゐるかといふことを、知ることができるのだ。この朝になつてはじめて私たちは、たしかにこの大きなばくちに勝つてあらう、純潔の見本ともいふべきわれらの偶像がきつと私たちのためにあいつをこつびどくとつちめてくれるだらう、といふことを何故ともなしに感じたのであつた。私たちはこの數日のあひだ、兵隊あがりかひつきりなしに、しつこくターニヤの後を追つかけまはしてゐるといふことを、絶えず耳にしてゐた。けれど、なぜか私たちはだれ一人として、ターニヤにむかつて、彼女がその男に對してどんな態度をとつてゐるかといふことを訊ねようとするものはなかつた。彼女の方では、毎朝きちんきちんと巻パンをとり私たちのところへ姿をあらはした、そして少しもかはつたところは見えなかつた。その日も私たちは、まもなく彼女のこゑをききつけた。

——囚人さん！ きたわよ……

私たちはいそいで彼女をいれてやつた。彼女が入つてくるのを、私たちはいつになく黙つてむかへた。彼女の顔をじつと穴のあくほど見つめながら、私たちは何といつたらしいのか、どう訊ねたらしいのか、さつぱりわからなかつた。私たちは陰氣にかたまりあつて、だまりこくつて、彼女のまへに突立つてゐた。彼女はどうかやらいつもとちがつた有様に、ひどくびつくりしたらしかつた、そしてとつせん私たちは、彼女の顔色がさつとかはり、急におちつきを失つたのに氣づいた。彼女はその場でしきりにもぢもぢしてゐたが、やがておさへつけられたやうな聲をしぼつて、訊ねた。

——ねえ、あんたたち、どうしたつていふの、これは？……

——そいぢや、お前の方はどうなんだい？——焼き手が彼女から眼をはなさずに、ぶつきらぼうにいつた。

——わたしが、どうかしたの？

——いや、な、なんでもねえんだが……

——ぢぢや、ねえ、早くパンをちやうだいよ……

彼女はこれまで自分の方から催促したことなぞ一度もなかつたのに……

——まあ、さうあわてるなよ！——焼き手がじつと突立つたまま、依然として彼女の顔から眼をはなさずに、いつた。

すると彼女はふいに、くるりと後ろをふりむいて、扉口からかけだしていつてしまった。焼き手は金のしやもじをとりあげて、籠の扉をあけながら、しづかにいつた。

——どうやら……せしめられたな！……あの兵隊あがりの畜生め！……なんて太てえ野郎だ！

……

私たちは羊の群のやうにおしあひながら仕事臺の方にかへつてきて、だまつて腰をおろすと、いかにも氣乗りのしないやうな様子で仕事にかかった。まもなく、だれかがいつた。

——しかしなア、ひよつとしたら、まだ……

——ふん、まだどうだつてんだ？ はつきりいつてみろい！——焼き手がどなつた。

私たちは彼が利口な人間だといふことを、さうだ、私たちのうちでいちばん賢い人間だといふことを、みんな知つてゐた。ことに、いまの彼の叫びごゑは、兵隊あがりの勝利が確實であることを語つてゐるのが、私たちにもよくわかつた……私たちはなにかしら不安な、もの悲しい氣分にとざされた……

十二時の、ちやうどおひるのときに、兵隊あがりややつてきた。あひかはらずハイカラな、こざつぱりした身なりをしてゐて、いつものやうに無遠慮に私たちをながめまはした。ところが私たちの方では、彼の顔を見かへすのが、へんに氣まつい思ひがした。

——さあ、諸君、おのぞみとあれば、この兵隊あがりの腕前をお目にかけますぜ。——彼はさういつて、得意さうに笑つた。——ほれ、あの出入口のわきんとこまできて、あの隙き間からのぞいてみるさ……いいかね？

私たちはすぐにでかけていつて、みんなで押しあひしながら、中庭につきだしてゐる出入口のわきの板塀の隙き間のところにかじりついた。私たちはそれほど長く待たされはしなかつた……まもなく、なにかもの思はしげな顔つきをしたターニャが姿をあらはし、いそぎ足で庭を横ぎつていつた——雪どけがしてぐちよぐちよになつた水溜りをひよいひよいとびこえながら。そして彼女は穴倉の扉口に姿をけした。するとそのあとから兵隊あがりや、ゆつくりとした足どりで、口笛をふきながら、そこへ入つていつた。両手をポケットに突つこんでをり、口髭がびくびくふるへてゐた……

雨がふつてきた。私たちは雨の滴が水溜りにおちるのをながめてゐた。雨の滴がおちると、その水面には皺のやうなさざなみがたつた。暗い、じめじめした、ひどく陰氣くさい日であつた。屋根のうへにはまだ雪がのこつてゐたが、地上にはもう汚らしい泥んこの地面がいたるところに

顔をだしてゐた。もつとも屋根の雪にも、いちめんに緒ちやけた汚れめがついてゐた。雨はわびしい音をたてて、しづかに降りそそいだ。私たちは身體がぞくぞくしてきて、もう待つてゐるのがいやになつた……

さつきの穴倉から、こんどは兵隊あがりの方がさきにでてきた。彼は例のとほり両手をポケットに突つこみ、口髭をびくびくふるはせながら、ゆつくりとした足どりで中庭をもどつていつた。まもなく、ターニャもでてきた。彼女の双の眼は……ああ、歡喜と幸福にもえてゐるではないが！そして唇には微笑がただよつてゐる。彼女は、まるで夢でもみてゐるやうに、おぼつかない足どりで、よろめきながら、歩いていつた……

私たちは平氣な顔をして、だまつてそれを見すごすことはできなかつた。みんなでいきなり扉をおしあけて、いつせいに中庭にとびだしてゆき、口笛をふきならして、ありつたけの聲をふりたて、荒荒しく、憎憎しげに彼女にわめきたてた。

彼女は私たちの姿をみると、ぎくりとして、まるで根がはえたやうに泥濘のなかに棒立ちになつてしまつた。私たちは彼女をとりまいて、遠慮會釋もなく惡態をつき、聞くにたへない罵詈雑言をあびせかけた。

私たちは、彼女が出るも引くもできなくなつたのを知ると、もうさつきのやうな大きな聲はたえず、ゆつくりとかまへて折檻にかかつた。私たちはぐるりと彼女をとりまいてしまつてゐたので、いくらでも好きなだけ彼女をいぢめることができたのであつた。けれどなぜか知らないが、私たちは手だしだけはけつしてしなかつた。彼女は私たちのまんなかに突立つて、おどおどして、顔をあつちへむけたり、こつちへむけたりしながら、私たちの惡口をきいてゐた。私たちはいよいよ圖にのつて、口からでるかぎりの惡口暴言をたたきつけたのであつた。

彼女の顔からは血の氣が失せた。つひさつきまであんなに幸福さうにかがやいてゐた碧い双の眼が、いまは驚愕のあまりに大きく見ひらかれ、胸は苦しげに波うち、唇はひくひくふるへてゐた。

だが私たちは彼女をとりまいて、仕返しをしてゐたのだ——だつて、彼女は私たちを裏切つたのではないか。彼女は私たちのものだつたのだ、私たちは彼女にできるだけのことをしてやつた。なるほど、できるだけのことをしたといつても、それは貧者の一燈にすぎなかつたかもしれない、けれどとにかく私たち二十六人の男が彼女一人に誠意をつくしたのであつた、だからいま私たちはどんなに彼女を苦しめたつて、苦しめ足りはしないのだ、この罪を償ふやうな苦しみを彼女にあたへることはどうしたつてできやしないのだ。それにしても、どんなにひどく私たちは彼女をいためつけたことであらう！……彼女はそのあひだぢゆうじつとおし黙つて、眼を大きく見ひら



いて私たちをながめてゐた。雨が彼女の全身をぐつしよりぬらした。

私たちは嗤つたり、わめいたり、泣き聲をたてたりした……他の連中までが私たちの仲間に加はつてきた……だれかがターニヤの上衣の袖をつかんだ……

ふいに彼女の兩眼がきらりと光つた。彼女はもう悠然とかまへて、兩手をあげて髪をなほし、甲高いけれどおちついた聲で、私たちに面とむかつてきつぱりといつた。

——あーあ、あんたたちはみんな氣の毒に、牢屋へ入つてゐるやうなもんね！……

さうして彼女はづかづかと私たちの方にむかつて歩いてきた。まるで私たちが彼女のまへにがんばつて、道をさへぎつてゐるのなぞ無視してしまつたやうな、傍若無人な足どりだつた。だものだから、その勢にのまれてしまつて、私たちは實際にだれ一人として彼女の行手をさへぎらうとするものがなかつたのである。

私たちの圍みをぬけると、彼女はもう私たちの方をふりむきもせず、まへと同じやうに甲高い、そしていくらか嘲りをふくんだ誇らしげな調子で叫んだ。

——チョツ、畜生め……いけすかない奴ばつかしだわ……

そして、この生一本な、美しい、自尊心のたかい少女は去つていつた。

私たちは、中庭のまんなかの泥濘のなかに立ちつくしてゐた——太陽のない灰色の空の下で、

冷い雨にうたれて……

やがてそのうちに私たちもだまりこくつて、あのじめじめした石の穴倉のなかにかへつていつた。あひかはらず、太陽は私たちの窓からのぞきこむことはなかつた、そしてターニヤももつそれつきり私たちのところにはやつて來なくなつた！……

(一八九九年作)

## 解題

ゴリキイ (Maksim Gor'kij, 1869—1936) は物を書きだしたばかりの頃、非常にコロレンコの世話になつたものである。一八九三年にでた短篇『嘘つきの鶴と眞理を愛する啄木鳥の話』を読んで以來、コロレンコはゴリキイの才能をみとめて、なにくれとなく面倒をみてやつてゐた。一八九四年の二月、ニージェゴロドの新聞『ヴォルガリー』に、『アルヒップ爺さんとレニカ』がのつた。この短篇をよんでコロレンコはすっかり感心してしまひ、ゴリキイに會ふとさつそく、もう地方新聞相手の短篇はやめて、中央の雑誌にのせるやうな本格的な小説をかいてみるやうにとすめたのであつた。

127

ゴリキイは、すぐにその「本格的な小説」にとりかかつた。以前放浪時代に、ニコラエフの町の病院で、隣りあはせのベッドにねてゐたオデッサの浮浪人からきいた話を題材にして、二日かかつて書きあげた。——それがこの『チェルカッシ』(Tchelkash)であつた。すぐにコロレンコのところにもつてゆくと、コロレンコは激賞した。やがて翌一八九五年、コロレンコが主宰してゐた、當時の一流の雑誌『ロシヤの富』の六月號の巻頭に、それは掲載された。この一作に

よつて、たちまちゴリキイは中央の文壇に地歩をかためてしまつたのである。

解

周囲の醜悪な世界に反抗する孤立者、小市民的な凡俗な生活に反抗して自由を愛好する浮浪人——それがゴリキイの初期の作品の中心的な主人公であつた。ゴリキイはいつも、空想や傳説の世界から、あるひは浮浪人の世界から、大膽不敵な人物をつれてきて、貪婪な小所有者や臆病な俗物に對立させてゐる——そして、それによつて彼は、人間を奴隷化し、機械化してしまつた社會組織にたいして反抗を示してゐるのだ。

さういふ點からいつて、『チエルカッシ』は、ゴリキイの初期の最も代表的な作品である。

題

チエルカッシは、エンゲルスのいはゆる「まだ自らイニシアチヴをとつて、獨立的に行動することが出来るやうな性格をもつてゐる人間」としてあらはれてゐるのだ。ここにチエルカッシの性格の意義があるといへる。

初期のゴリキイについては、ニーチェ主義の歌ひ手といふ見解がひろまつてゐた。つまり、

このチエルカッシのやうな人物を、ニーチェの超人主義の産物とする見方である。このやうな見解が、わが國にもながく通用してゐた。しかし、もうそんな誤つたレッテルは、はぎすてられなければならない。これはブルジョア批評家たちが、ゴリキイを自分たちの陣營にひきいれようとして作りあげた傳説にすぎないからである。

チエルカッシの性格は、ニーチェの超人主義とは本質的になんらの共通點ももつてゐやしない。ゴリキイの頭にあるのはつねに人類全體の運命であり、抑壓された人人の運命である。彼はまさに失はれようとしてゐる人間性を、このチエルカッシ的な人物によつて、最後の一线で守らうとしてゐるのだ。

解

『二十六人の男と一人の少女』(Dvadsati shesti i odna) はゴリキイの創作の第一期の終りにあたる一八九九年の作である。

題

ゴリキイは一八八四年に、大學へ入らうといふ望みをもつてカザンにでかけていつた。けれど生活に追はれて、大學へ入るかはりに、セミョーノフのパン製造所に入つてはたらくことになつた。——この短篇に描かれてゐるのは、その頃の生活である。

その地下室のパン焼場では、一日に十四時間もはたらかされた。肉體的にも、精神的にも、實に苦しい生活であつた。ゴリキイは、後にこの時代を回想して、「苦しかつたけれど、教へられるところの多かつた時代」といつてゐる。

この短篇は、ゴリキイ自身「敘事詩」といふサブタイトルをつけてゐるが、まづたく詩のやうに調子のたかい、美しいものである。人間にたいするあたたかい愛情が作の基調をなしてをり、それがこの短篇に、世にもまれな美しさと親しみをあたへてゐるのだ。たしかにこれは、ゴリキイの初期の作品のなかで、もつとも愛すべきものの一つである。

一九三七年三月

上田進

追記——ちやうどこの校正がをはつた日に、妻の千代子がこの世を去りました。ぼくはこの本を彼女の墓前に捧げたいと思ひます。(四月六日)

(永井製本)

昭和十二年五月十日印刷  
昭和十二年五月十五日發行

チエルカツシ ★  
定價二十錢

譯者 上田進

發行者 岩波茂雄

印刷者 白井赫太郎

精興社印刷

岩波文庫  
1497

發行所

東京市神田區  
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七〇  
九段 〇〇一八七〇  
振替口座東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

道理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。書ては民を愚味ならしめるために愚藝が最も狭き當字に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の編譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては廣選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て奮然とする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのちるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

- 古事記 幸田成友校訂
日本書紀 上卷 黒坂勝美編
日本書紀 中卷 黒坂勝美編
日本書紀 下卷 黒坂勝美編
記紀歌謠集 武田祐吉校註
風土記 武田祐吉編
祝詞・壽詞 千田 豐編
續日本紀 宣命 倉野豐司編
新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
古語拾遺 加藤玄智校訂
神樂歌・催馬樂 武田祐吉編

古今和歌集 尾上八郎校訂

- 竹取物語 並附録 島津久基校訂
伊勢物語 原代弘賢校訂
土佐日記 池田龜藏校訂
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂
枕草子(春曙抄) 池田龜藏校訂
枕草子(春曙抄) 中池田龜藏校訂
枕草子(春曙抄) 下池田龜藏校訂
枕草子(春曙抄) 卷下 池田龜藏校訂
源氏物語(一) 島津久基校訂
源氏物語(二) 島津久基校訂
源氏物語(三) 島津久基校訂
源氏物語(四) 島津久基校訂
源氏物語(五) 島津久基校訂
紫式部日記 池田龜藏校訂
更級日記 西下 一校訂
三條西 榮花物語 上 三條西公正校訂
三條西 榮花物語 中 三條西公正校訂
三條西 榮花物語 下 三條西公正校訂

大鏡 和田英松校訂

- 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
藤原定家(附定家) 佐佐木信綱校訂
新金槐和歌集 增補 齋藤茂吉校訂
中世歌論集 久松潜一編
六百番歌 合 齋藤茂吉校訂
方丈記 山田孝雄校訂
松浦宮物語 齋藤實子校訂
保元物語 語 岸谷 誠一校訂
平治物語 語 岸谷 誠一校訂
平家物語 上卷 山田孝雄校訂
平家物語 下卷 山田孝雄校訂
東關紀行・海道記 玉井 幸助校訂



歌舞音樂略史 小中村清順著 ★★  
 俗樂旋律考 上原六四郎著 ★★  
 論畫 四種 坂崎坦編 ★★  
 茶の 本村 實三著 ★★

現代文學

小説 神 隨 坪内逍遙著 ★★  
 當世書生氣質 坪内逍遙著 ★★  
 新曲 藤 映 島 坪内逍遙著 ★★  
 ちたかたの記 他三篇 森 鴎外著 ★★  
 本夕・セクスアリス 森 鴎外著 ★★  
 雁 森 鴎外著 ★★  
 講持院ケ原の歌 森 鴎外著 ★★  
 左千夫歌集 土屋文明著 ★★  
 左千夫歌論抄 土屋文明著 ★★  
 二人女房 尾崎紅葉著 ★★  
 子規歌集 正岡子規著 ★★

墨汁一滴 正岡子規著 ★★  
 病牀六尺 正岡子規著 ★★  
 仰臥漫錄 正岡子規著 ★★  
 漾 虚 集 夏目漱石著 ★★  
 坊つちやん 夏目漱石著 ★★  
 草 枕 夏目漱石著 ★★  
 行 人 夏目漱石著 ★★  
 こゝろ 夏目漱石著 ★★  
 硝子戸の中 夏目漱石著 ★★  
 道 草 夏目漱石著 ★★  
 明 暗 上卷 夏目漱石著 ★★  
 明 暗 下卷 夏目漱石著 ★★  
 風流佛・一口飯 寺田露伴著 ★★  
 五重塔 寺田露伴著 ★★  
 太郎坊 他三篇 幸田露伴著 ★★  
 自然と人生 徳富蘆花著 ★★  
 北村透谷集 島崎藤村編 ★★

文道遺稿 金築松桂編 ★★  
 觀音岩 前篇 川上眉山著 ★★  
 觀音岩 後篇 川上眉山著 ★★  
 源をぞ 他二篇 國木田獨步著 ★★  
 運命論者 他三篇 國木田獨步著 ★★  
 號 外 他六篇 國木田獨步著 ★★  
 蒲團・一兵卒 田山花袋著 ★★  
 生 田山花袋著 ★★  
 田舎教 師田山花袋著 ★★  
 晚翠詩抄 土井晩翠著 ★★  
 にこり 八木 龍一著 ★★  
 藤村詩抄 島崎藤村自選 ★★  
 千曲川のスケッチ 島崎藤村著 ★★  
 生ひ立ちの記 島崎藤村著 ★★  
 櫻の實の熟する時 島崎藤村著 ★★  
 飯倉だより 島崎藤村著 ★★  
 春を待ちつつ 島崎藤村著 ★★

高野 野 花 作 ★★  
 註文帳・白鷺泉 花 作 ★★  
 歌行 燈泉 花 作 ★★  
 風流儼法 他三篇 高濱虛子著 ★★  
 上田敏詩抄 茅野蒼々編 ★★  
 赤彦歌集 久保田不二子選 ★★  
 有明詩抄 藤原有明著 ★★  
 泣菫詩抄 藤田泣菫著 ★★  
 宣 言 有鳥武郎著 ★★  
 長塚節歌集 藤原吉選 ★★  
 入江のほとり 正宗白鳥著 ★★  
 生まざりしならば 正宗白鳥著 ★★  
 千鳥 他四篇 鈴木三重吉著 ★★  
 桑の 實 鈴木三重吉著 ★★  
 銀の 匙 中 勲助作 ★★  
 煤の 煙 森田草平作 ★★  
 和解・或る 死 志賀直哉著 ★★

小僧の神様 他十篇 志賀直哉著 ★★  
 若山牧水歌集 若山喜末子選 ★★  
 白秋詩抄 北原白秋著 ★★  
 白秋抒情詩抄 北原白秋著 ★★  
 海神 丸 野上彌生子著 ★★  
 大石良 雄 野上彌生子著 ★★  
 そ の 妹 武青小路實篤著 ★★  
 幸福 者 武青小路實篤著 ★★  
 人間萬歳 武青小路實篤著 ★★  
 友 情 武青小路實篤著 ★★  
 波 山本有三著 ★★  
 青銅の基督 長興善郎著 ★★  
 陸奥直次郎 長興善郎著 ★★  
 出家とその弟子 倉田百三著 ★★  
 布施太子の入山 倉田百三著 ★★  
 倫 盜 芥川龍之介著 ★★  
 河 童 芥川龍之介著 ★★

俳儒の言葉 芥川龍之介著 ★★  
 西方の人 他二篇 芥川龍之介著 ★★  
 春夫詩鈔 佐藤春夫著 ★★  
 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 ★★  
 英・米文學  
 ニートピア (理想郷) トマス・モア著 ★★  
 ベーコン隨筆集 神吉三郎譯 ★★  
 フォーrest博士 マーロウ作 ★★  
 開技者サムソン 中村爲治譯 ★★  
 プレイク抒情詩抄 露文重譯註 ★★  
 パーリンズ詩集 中村爲治譯 ★★  
 湖の麗人 スコット作 ★★  
 ラム沙翁物語 野上彌生子譯 ★★  
 阿片常用者の告白 田部重治譯 ★★  
 イン・メモリアム 入江直樹譯 ★★  
 イノック・アーデン 入江直樹譯 ★★





海の波 戀の波  
 みれん  
 アナトール  
 戀愛三昧  
 綠の鸚鵡他一篇

佛・白文學

ボリウクト  
 人間 嫁  
 タレーザの東方  
 愛と偶然との戯れ  
 マインレーネキオ  
 懺悔録 上巻  
 懺悔録 中巻  
 懺悔録 下巻  
 ボオルとヴィルジニイ  
 アドルフ

スチル赤と黒上巻  
 スチル赤と黒下巻  
 パルムの僧院上巻  
 カストロの尼  
 戀愛論 上巻  
 戀愛論 下巻  
 從兄ボンズ  
 知られざる愛作  
 海邊の悲劇他三篇  
 レ・ミゼラブル (一)  
 レ・ミゼラブル (二)  
 愛の妖  
 エトルリアの靈  
 コロンバ  
 カルメン  
 屋根裏の哲人

椿 姫  
 ブチ・シヨウズ  
 陽気なタルタラン  
 風車小屋だより  
 月曜物語  
 昔がたり  
 ノア・ノア  
 過 去  
 氷島の漁夫  
 お菊さん  
 女の一生  
 生の誘惑  
 モウパッサン短編集  
 ビエルとジャン  
 水の上  
 別れも愉し他一篇

ジャン クリストフ (一)  
 ジャン クリストフ (二)  
 ジャン クリストフ (三)  
 ジャン クリストフ (四)  
 ジャン クリストフ (五)  
 ジャン クリストフ (六)  
 ジャン クリストフ (七)  
 ジャン クリストフ (八)  
 愛と死との戯れ  
 獅子座の流星群  
 パリ ヌウド  
 鎖を離れたプロメテ  
 背徳者  
 法王廳の抜穴  
 田園交響樂  
 若き日の手紙

露西亞文學  
 母への手紙  
 青い鳥  
 オネーギン  
 スペードの女王  
 イワニン・イワノキツチ  
 キツチとが喧嘩をした話  
 外 套  
 昔氣質の地主たち  
 肖像畫・馬車  
 檢察官  
 現代のヒーロー  
 皇帝フォードル  
 ルーゼン  
 初恋  
 煙  
 春の水

ブニンとパブリン  
 處女地 前篇  
 處女地 後篇  
 ゲーデル 散文詩  
 罪と罰 第一卷  
 罪と罰 第二卷  
 罪と罰 第三卷  
 永遠の良人  
 惡靈 第一編  
 惡靈 第二編(上)  
 惡靈 第二編(下)  
 惡靈 第三編  
 カラマーゾフの兄弟 第一卷  
 カラマーゾフの兄弟 第二卷  
 カラマーゾフの兄弟 第三卷  
 カラマーゾフの兄弟 第四卷



世界人類史物語上巻 ヨブマン 原譯者  
世界人類史物語下巻 コブマン 原譯者  
ソノイ 蒙古史 上巻 田中幸一 原譯者

東洋思想・文學

論 語 武内義雄譯註  
孔子家語 藤原正校譯  
孟子 武内義雄譯註  
子思子(中篇) 藤原正校譯  
菜根譚 山口樂常譯註  
孫子 阿多俊介譯註  
鹽鐵論 曾我部龍雄譯註  
傳習錄 山田直治譯註  
楚辭 橋本備後譯註  
陶淵明集 渡山又四郎譯註  
李太白詩選上巻 渡山又四郎譯註  
李太白詩選下巻 渡山又四郎譯註

反デューリング論 下巻 エンゲルス著 長谷部文雄譯  
フオイエルバツハ論 エンゲルス著 佐野文夫譯  
エンゲル自然辯證法上巻 加古正二譯  
エンゲル自然辯證法下巻 加古正二譯  
天才・悪魔 ブレンターノ著 藤田英雄譯  
眠らぬ夜 第一部上巻 ヒルテイ著  
眠らぬ夜 第一部下巻 ヒルテイ著  
幸福論 草間平作譯  
哲學の本質 戸田三郎譯  
世界觀の研究 山本英一譯  
人間的、餘りに人間的 戸田三郎譯  
この人を見よ 安倍能成譯  
反時代的考察上巻 井上政次譯  
反時代的考察下巻 井上政次譯  
七大哲人 安倍能成譯  
ケイベル博士隨筆集 久保能成譯  
人間の精神 立花祐三著

杜 詩 卷之一 渡山又四郎譯註  
杜 詩 卷之二 渡山又四郎譯註  
杜 詩 卷之三 渡山又四郎譯註  
杜 詩 卷之四 渡山又四郎譯註  
唐詩選 上巻 渡山又四郎譯註  
唐詩選(附作序) 渡山又四郎譯註  
寒山詩 太田惺藏譯註  
支那通俗古今奇觀 漢主人譯  
魯迅選集 増田 渉譯  
朝鮮童謡選 金素雲譯  
朝鮮民謡選 金素雲譯  
アイヌユーカラ 金田一京助譯  
哲學・教育  
フソクラテスの精明久保 健譯  
トックリト 阿部次郎譯  
フワプロタゴラス 菊池一朗譯  
マスト形而上學 高桑純夫譯

哲學とは何か、ウインゲルト著  
イマヌエル・カント 河東 清譯  
歴史と自然科学・道 藤田英雄譯  
徳の原理に就て 藤田英雄譯  
永遠の相下に 他三篇 藤田英雄譯  
ウインゲルト 哲學概論 渡水・高桑・山本譯  
ウインゲルト 哲學概論 第一部 渡水・高桑・山本譯  
ウインゲルト 哲學概論 第二部 渡水・高桑・山本譯  
心理學原論 大脇 謙一譯  
自然に於ける美 ソロヴィヨフ著  
藝術の一般的意義 高村理智夫譯  
プレハヘーゲル論 窪 太郎譯  
カントとゲエテ 谷川 徹三譯  
物質と記憶 高橋 星美譯  
認識の對象 山内 得立譯  
唯物論と經驗批 上巻 佐野文夫譯  
唯物論と經驗批 中巻 佐野文夫譯  
唯物論と經驗批 下巻 佐野文夫譯  
エミール(第一篇) 平林初之輔譯  
エミール(第二篇) 平林初之輔譯  
エミール(第三篇) 平林初之輔譯

スピノザ 哲學體系 小島 嘉治譯  
知性改善論 島中 實志譯  
人間機械論 杉 健夫譯  
ヒューム 人性論 太田 西男譯  
純粹理性批判上巻 天野 貞祐譯  
純粹理性批判下巻 天野 貞祐譯  
網際理性批判下巻 二 天野 貞祐譯  
カンプロレゴメナ 桑本 義典譯  
實踐理性批判 宮本 和吉譯  
ヘーゲル 哲學の批判 佐野 文夫譯  
將來の哲學の 根 木 命 植村 晋六譯  
唯一者とその所有 卷上 スチルネル著  
唯一者とその所有 卷下 スチルネル著  
自然認識の限界につ 坂田 徳男譯  
いて・宇宙の七つの謎 坂田 徳男譯  
哲學の貧困 渡野 豊譯  
マルクスドイツエ・リヤザノフ編  
エンゲルスイデオロギー 三 木 清譯  
反デューリング論 上巻 長谷部文雄譯

宗教  
アウグスの懺悔録 フォン・ハルトマン著  
テインの懺悔録 山谷 省吾譯  
基督教者の自由 石原 謙譯  
イニエス ブツ 七著  
佛説四十二章經 經 得能 文譯註  
佛説遺教 經 荻原 雲來譯註  
臨濟 錄 朝比奈 宗道譯註  
大乘起信論 宇井 伯壽譯註  
菩薩藏傳心法要 宇井 伯壽譯註  
法華義疏 上巻 關 徳太子御説  
法華義疏 下巻 關 徳太子御説  
法華三教指歸 加藤 精神譯註



岩波文庫に就て

□岩波文庫は普及を第一義として刊行する廉價版であります。  
 □内容の厳選 東西古今の古典並に價値高い良書を續々刊行、網羅せしめ、校訂、翻譯に於て、また校正、印刷、製本等に於ても最善の注意を拂つてゐます。  
 □最低の廉價 定價は専ら低廉を旨とし、豊富な内容を小さい形の中に収める形式を採つてゐます。  
 □購求の自由 豫約出版ではありませんので、讀者は何時でも自由に欲しいものを選択購求することが出来ます。全國の書店に取揃へてあります。  
 □携帶の至便 平福百穂畫伯の裝幀による菊半截判で、體裁は極めて潇洒、旅行その他の伴侶に至便であります。  
 □解説附目錄 岩波文庫の各書について解説を附した分類總目錄があります。

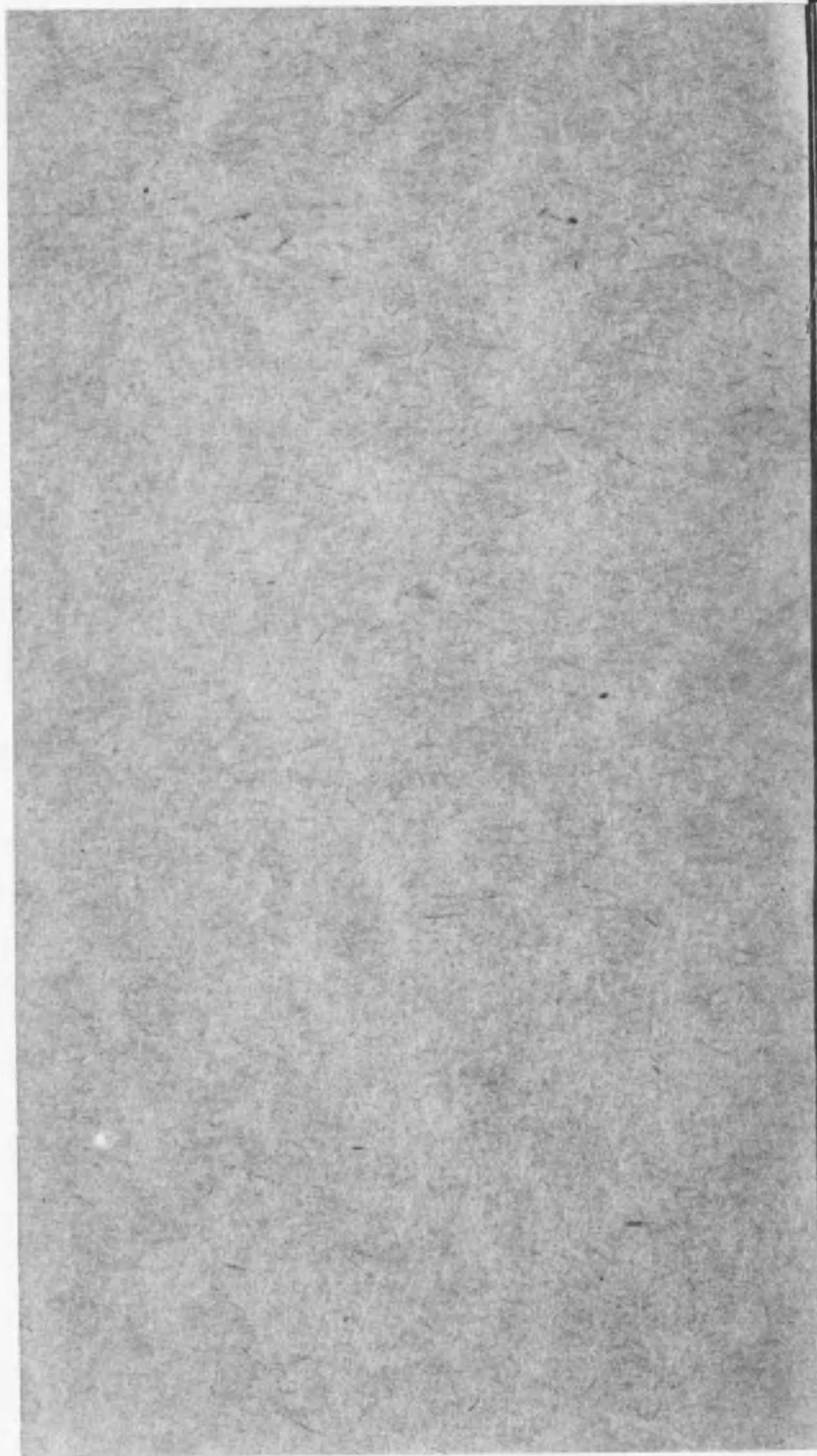
御申込み次第早速お送り申し上げます。  
 □定價は便宜上星(★)數を以て現はし、★一つが二十錢であります。定價と送料とを對にしますと大體次のやうになります。  
 定料二十錢 送料三錢  
 ★★ 四十錢 六錢  
 ★★ 六十錢 九錢  
 ★★ 八十錢 十錢  
 ★★ 一〇〇錢 十錢  
 早敷はまた頁數をも現はし、★一つは大體百頁乃至百五十頁であります。  
 □御注文は、すべて前金でお願ひ致します。著者名・書名・卷數・冊數及び御住所氏名を楷書で明記の上、代金に必ず送料を添へてお送り願ひます。  
 □御送金には「振替東京二六二四〇番」の御利用が最も安全で簡便であります。爲替で御送金頂いても結構であります。また切手代用の場合には一割増に願ひます。

最新刊書

當世書生氣質 坪内逍遙著 ★★

若き日の藝術家の自畫像 名原廣三郎譯 ★★★	肖像畫・馬車 平井肇譯 ★	レ・ミゼラブル(一) ユイゴイ著 豐島與志雄譯 ★★★	カント 純粹理性批判 下卷一 天野貞祐譯 ★★★	吾等がために踊れ 他八編 ゴールズワージー作 龍口直太郎譯 ★★★	アンデルセン自傳 大畑末吉譯 ★★★	ブッデンブロオク一家(一) トオマス・マン作 成瀬無極譯 ★★★	後世への最大遺物 他二篇 内村燧三著 ★
レ・ミゼラブル(二) ユイゴイ著 豐島與志雄譯 ★★★	ブッデンブロオク一家(二) トオマス・マン作 成瀬無極譯 ★★★	アラソン島 シンダグ作 姉崎正見譯 ★★★	カント 純粹理性批判 下卷二 天野貞祐譯 ★★★	風土記 武田祐吉編 ★★★	二都物語 中卷 デイツケンズ作 佐々木直次郎譯 ★★★	ブッデンブロオク一家(三) トオマス・マン作 成瀬無極譯 ★★★	人間的、餘りに人間的 上卷 自由精神のための書 戸田三郎譯 ★★★





569  
14



終